

— 千葉県市原市 —

ふくますやま の かみ
福増山ノ神遺跡発掘調査報告書

1989・3

株式会社 城 装

財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は、東京湾東岸の奥に接し市域南限は房総半島中央部に位置し、先史より自然条件に恵まれた温暖な地域で有ります。市内各所には先人たちの足跡である遺跡が豊富に認められ、このことは、千葉県下でも有数の貝塚である西広貝塚・山倉貝塚をはじめとして、上総国分二寺などに代表される多くの遺跡の存在が示しています。

近年千葉県は、首都圏に接することから人口急増に伴う宅地開発ならびに道路網の整備が進展してまいりましたが、それらに対応することが行政の急務ともなっております。当市原市もこのような急増する土地開発行為と、それに伴う埋蔵文化財調査が飛躍的に増加しております。今日ほど地域開発と埋蔵文化財保護との調和を深く求められている時はないとも言えます。また、社会教育や地域の生涯教育の一助としての埋蔵文化財の必要性とその責任はますます重要に成りつつあります。今回本報告書でご報告いたします福増山ノ神遺跡もこのような背景のもとに、民間の開発に伴う事業として行なわれました。

当報告書は、これらの調査成果を収録したものであります。これらの資料が、長く保存され、学術資料として研究者のみならず、博物館等の社会教育施設をとうして、広く市民の方々の文化財保護思想の育成に役立つとともに教育資料としてご利用いただければ幸いに存じます。

最後に、この調査にあたりご指導・ご協力を賜りました株式会社城装・文化庁・千葉県教育庁・市原市教育委員会を始め多くの方々に対し心より感謝申し上げます。

平成元年 3 月

財団法人 市原市文化財センター
理事長 星野 一郎

例 言

1. 本書は、千葉県市原市福増山ノ神26他に所在する、福増山ノ神遺跡の本調査報告書である。
2. 調査は、民間事業の産業廃棄物処理場建設に伴い実施したものである。
3. 発掘調査・整理作業は以下の通り行った。
(発掘遺跡名コード セ79) 確認調査 昭和63年 5月6日～5月12日、担当者 田所 真
本調査 昭和63年 6月15日～7月31日、担当者 浅利幸一
整理作業 昭和63年 8月1日～8月15日、担当者 浅利幸一
4. 本書の原稿執筆は、浅利幸一が行った。
5. 調査および本書の作成に際し、次の諸機関に御指導と御協力を賜った。
株式会社城装・株式会社城装代表取締役山岡弘・千葉県教育庁文化課・市原市教育委員会文化課
6. 本書に使用した方位は、座標北である。

市原市文化財センター組織表

昭和63年度

役員

理事長	星野 一郎 (教育委員会教育長)		
副理事長	大野 義規 (教育委員会社会教育部長)		
常務理事	須田 昇三 (専任)		
理事	滝口 宏 (早稲田大学名誉教授)	調査課	
理事	寺村 光晴 (和洋女子大学教授)	課	長 石田 広美
理事	海上 信久 (姉崎神社宮司)	主	幹 加藤 正信
理事	根本 正夫 (市企画部長)	主任調査研究員	宮本 敬一
理事	宮崎 芳雄 (市総務部長)	主任調査研究員	田中 清美
理事	地引 希壹 (市都市部長)	調査研究員	浅利 幸一
理事	安藤 隆一 (市総務部財政課長)	調査研究員	大村 直
監事	元吉 末喜 (市会計課長)	調査研究員	近藤 敏
監事	河野 徳三 (教育委員会総務課長)	調査研究員	高橋 康男

職員

庶務課		調査研究員	木對 和紀
課	長 田丸 萬富	調査研究員(嘱託)	田中 新史
主事	補 大鐘 光江	調査研究員(嘱託)	半田 堅三
事務員(嘱託)	秋田 晴美	事務員(嘱託)	高浦 貞子
事務員(嘱託)	石渡 あゆみ	事務員(嘱託)	田中 裕子

土層凡例

- 基本土層 A. 褐色土 B. 黒褐色土 C. 暗黒褐色土 D. 黒色土 E. 暗茶褐色土
F. 茶褐色土 G. 暗黄褐色土 H. 黄褐色土 I. 暗褐色土
- 混入土 1. 褐色土粒 2. 褐色土ブロック 3. ローム土 4. ローム粒
5. ロールブロック 6. 茶褐色粒 7. 茶褐色ブロック 8. 焼土粒
- 硬 さ なし、普通 a. 軟らかい b. やや硬い c. 硬い

本文目次

序文 理事長 星野 一郎

例言

(財)市原市文化財センター組織表・土層凡例

1	調査に至る経緯と経過	1
2	遺跡の立地と周辺の環境	1
3	検出された遺構	5
4	検出された遺物	21
5	まとめ	33

挿図目次

第1図	遺跡の位置および周辺の遺跡分布図	2
第2図	遺跡周辺の地形図	3
第3図	福増山ノ神遺跡全体図	4
第4図	1～12号跡実測図	8
第5図	13・15～19・21・23号跡実測図	9
第6図	25・27～34号跡実測図	10
第7図	35～38・40～43号跡実測図	11
第8図	22・45号跡実測図	13
第9図	1～4号住居跡実測図	14
第10図	5～9号住居跡実測図	15
第11図	10～12号住居跡実測図	16
第12図	1号方形周溝遺構実測図	17
第13図	1号方形周溝遺構玄室・2号方形周溝実測図	18
第14図	14・26・44号地下式改葬墓実測図	19
第15図	1号溝実測図	20
第16図	縄文式土器拓影図(1)	22
第17図	縄文式土器拓影図(2)	23
第18図	縄文式土器拓影図(3)	24
第19図	縄文式土器拓影図(4)・45号跡出土遺物実測図	25
第20図	1～3号住居跡出土遺物実測図	26
第21図	4・5号住居跡出土遺物実測図	27

第22図	6・7号住居跡出土遺物実測図	28
第23図	7～10号住居跡出土遺物実測図	29
第24図	33号跡・1号方形周溝遺構・26号土壇墓・石器実測図	30

図版目次

図版1	福増山ノ神遺跡航空写真
図版2	1～5・7～13・15～19号跡
図版3	21～23・27～31・33・35・36・38・40・41・43・45号跡
図版4	1～5号住居跡
図版5	6～10号住居跡
図版6	12号住居跡・1・2号方形周溝遺構
図版7	14・26・44号墓・遺跡近景
図版8	出土遺物(1)1～96
図版9	出土遺物(2)97～155

表目次

第1表	1～45号跡観察表	6
第2表	1～12号住居跡観察表	13
第3表	出土遺物観察表	31

1 調査に至る経緯

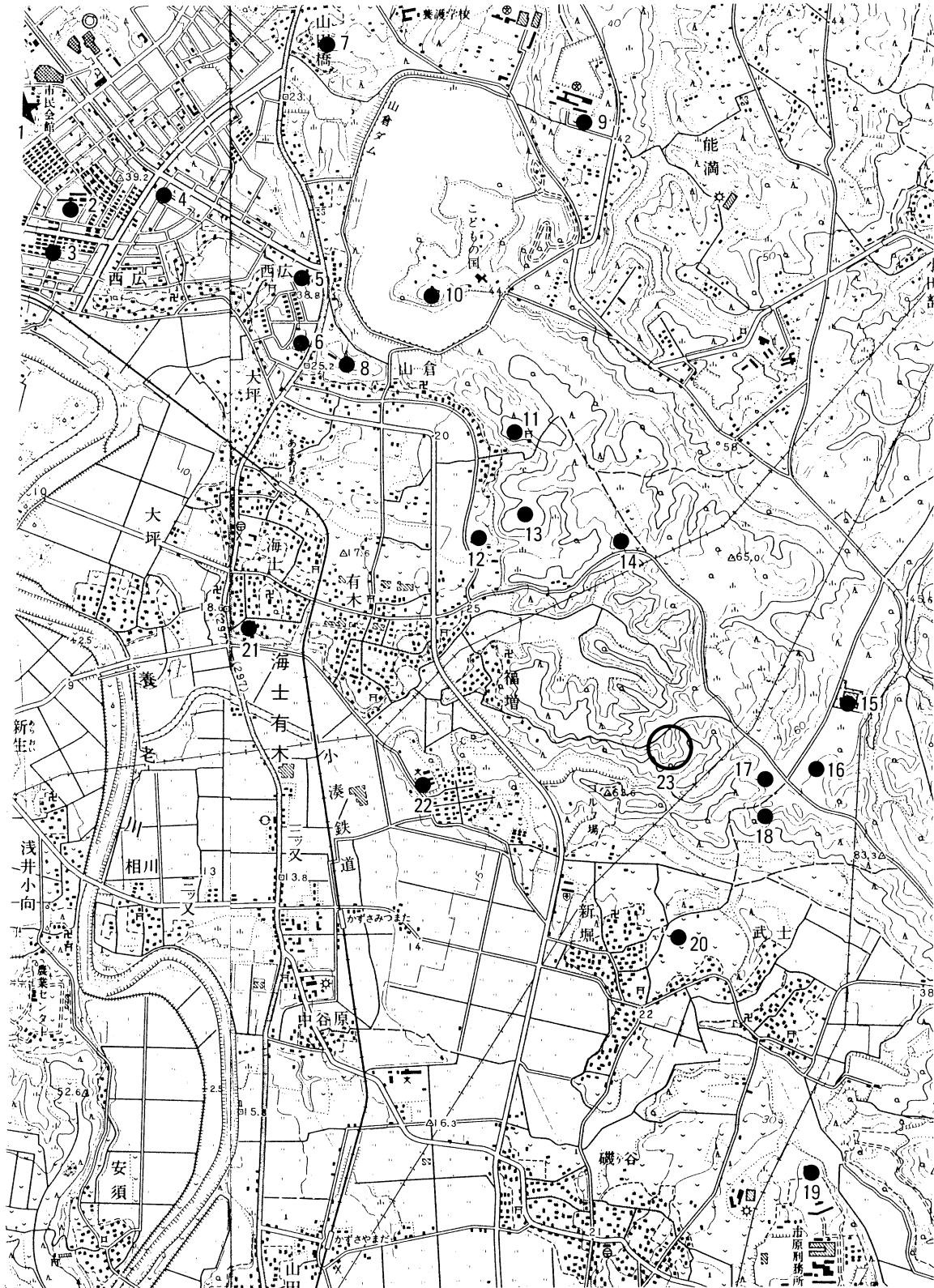
東京湾東岸に位置する市原市は、1960年代後半から高度経済成長の一躍を荷ない、また70年代には首都圏のベッドタウンとして、大規模な土地区画整理事業が行われ急速な開発とともに発展をとげてまいりました。しかしながら、80年代に入り活発な経済活動や開発行為等によりもたらされた産業廃棄物の処理は地球的規模の環境問題として、環境保護上の国際的社会問題として上げられます。当市原市に於いても不法行為による、産業廃棄物処理場の問題は地域住民を巻き込み、報道機関に取り上げられるほど深刻な社会問題となっています。このような状況のなかで、市原市字福増地区に、民間業者の開発により千葉県 の 指導を受けて大規模な産業廃棄物最終処分場建設が行われました。福増山ノ神遺跡は、この敷地内の一角に所在する遺跡であります。以下調査に至る経緯を付記する。

昭和61年11月14日付けで、株式会社城装代表取締役山岡弘氏より、事業地域内の埋蔵文化財の有無およびその取り扱いについての照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛てに提出され、それを受けて千葉県教育庁文化課と市原市教育委員会の現地踏査により、昭和61年12月4日付けで、敷地内の4,900㎡の土師器散布地の回答がなされた。昭和63年5月6日事業地域内の遺跡範囲および状況を把握すべく確認調査が実施され、確認対象面積は4,900㎡である。確認調査は、昭和63年度の国費・県費の補助を受けて行われた。結果、事業地域2,700㎡の本調査の回答がなされた。この回答により、千葉県教育庁文化課・株式会社城装・市原市教育委員会の三者の協議の結果、記録保存とする方針が決まった。記録保存に伴う発掘調査は財団法人市原市文化財センターへの委託事業として、昭和63年6月15日～7月31日に実施するに至った。

2 遺跡の立地と周辺の考古学的環境

福増山ノ神遺跡は、養老川中流域右岸のやや奥まった標高65～70m前後を測る台地上に所在する。当遺跡の位置する台地は、養老川右岸に連なる尾根状の台地から河岸平野に突き出た、幾多の東側に基部を有する小規模な舌状台地のひとつにある。市原市遺跡分布図ではNo.586の^{ここんか}九日台遺跡として周知され、山ノ神遺跡はこの南西端の一部を占めている。台地は東西長400m・南北長さ200mを測る。遺跡周辺では、福増池ノ谷遺跡・福増古墳群・武士遺跡・勝間遺跡等の調査が実施され、また小字名^{かわらけいし}土器石を中心とする地域は昭和62年～平成元年度まで千葉県文化財センターにより武士遺跡（以下武士土器石遺跡）として継続調査が行なわれている。

福増山ノ神遺跡に最も近距離の調査遺跡としては、台地東側基部隣接地を南北に貫く市道に埋設された上水本管工事のため昭和50年8月調査実施の武士遺跡がある。武士遺跡では、縄文中期～後期・弥生後期の集落跡の他、方形周溝遺構等が検出されている。武士土器石遺跡では延べ48,000㎡に及ぶ調査が行なわれ縄文時代中期後半の加曽利EⅢ式(古)段階から後期前半堀之内I(新)段階にかけての430軒にもおよぶ住居跡と掘立柱建物跡2棟・土壇1,000基、方形周溝遺構41基等が検出されている。また南東500mには武士廃寺・建市神社の存在が指摘されている。武士廃寺表彩の軒瓦は鋸齒文縁複弁連花文鏡瓦と深顎三重弧文字瓦をセットとするもので、国分寺より先行する時期の建立と考えられている。古墳時代の遺跡としては、福増古墳群では3基の円墳が調査され、このうち2基は房総砂岩の切り石による横穴式石室の存在が明らかとなっている。以上のごとく当地域は、考古学上の重要な地



1. 史跡上総国分寺 2. 蛇谷遺跡 3. 東間部多古墳群 4. 持塚古墳群 5. 西広貝塚
 6. 山倉古墳群 7. 山田橋大塚台古墳 8. 山倉八郎作古墳 9. 上大堀遺跡 10. 山倉
 貝塚 11. 山倉堂谷古墳群 12. 池ノ谷遺跡 13. 山倉猿子谷古墳群 14. 福増古墳群 15
 . 勝間遺跡 16. 武士(土器石貝塚)遺跡 17. 武士廢寺跡 18. 人見塚古墳 19. 北旭台
 遺跡 20. 鍋塚古墳他 21. 新殿古墳群 22. 敷郷古墳群 23. 福増山ノ神遺跡

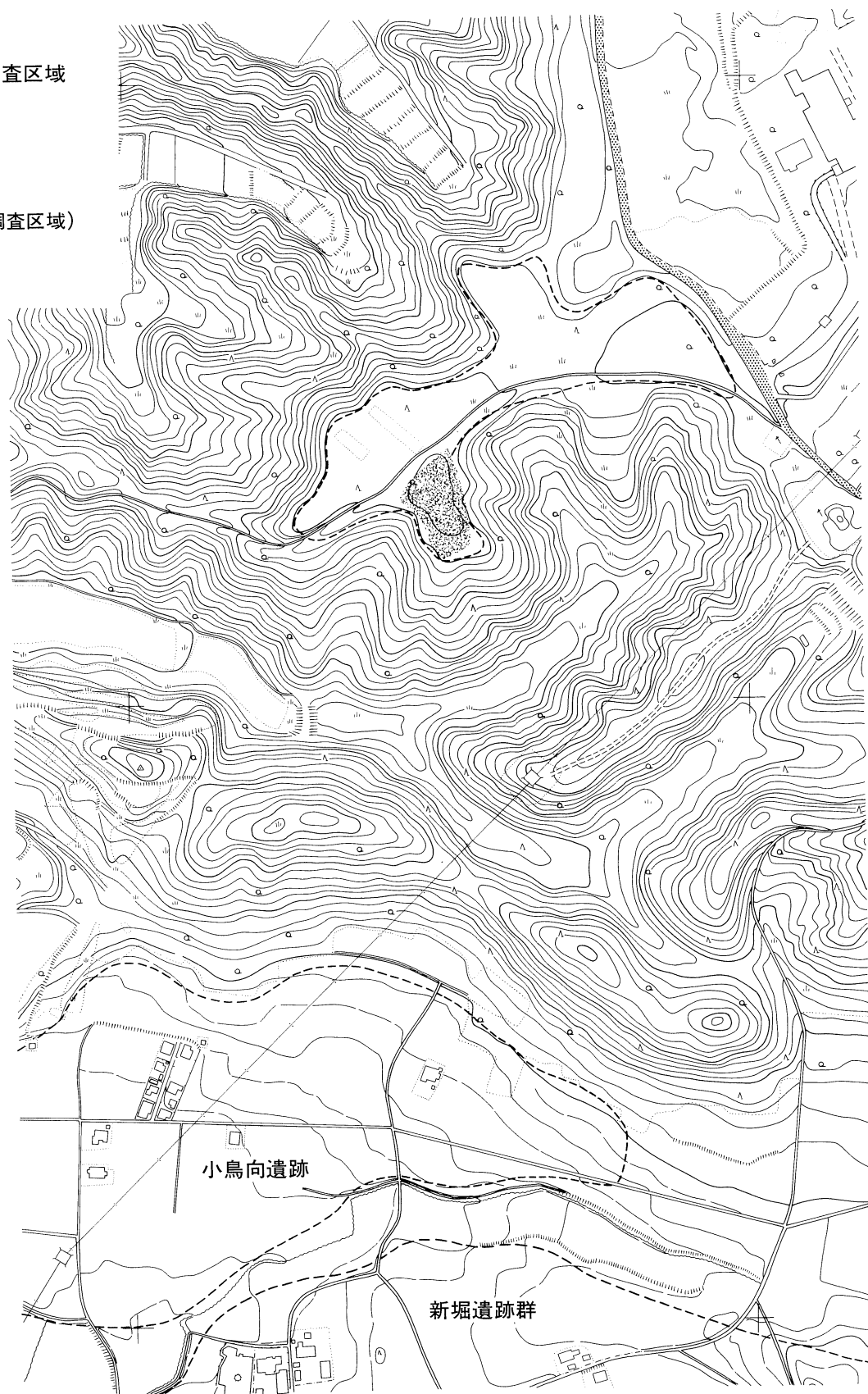
第1図 福増山ノ神遺跡の位置および周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)



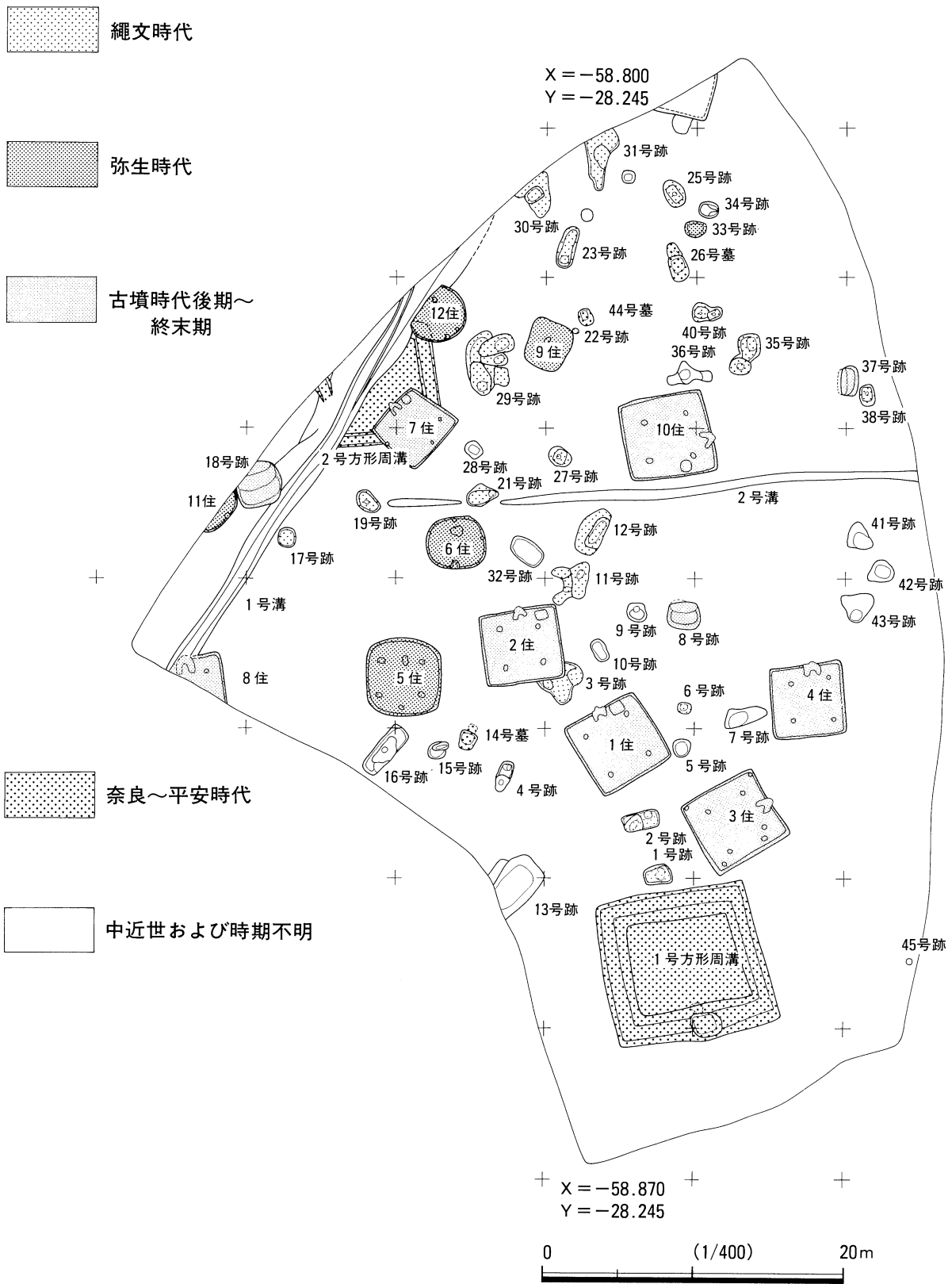
山ノ神遺跡調査区域



武士遺跡
(昭和50年度調査区域)



第2図 遺跡周辺の地形図 (S=1/5,000)



第3図 福増山ノ神遺跡全体図

域である。

3 検出された遺構

本調査に先立って行われた確認調査では、堅穴住居跡5軒・溝5条・炉穴2基・土壇7基等の遺構の存在が想定されたのに対し、本調査によって検出した遺構は、縄文時代早期炉穴3地点5基・陥し穴状遺構7基・性格不明落込み10基以上、縄文時代中期埋甕跡1基・集石跡1基・弥生時代と想定し得る土壇墓3基・堅穴住居跡5軒、古墳時代堅穴住居跡7軒、奈良～平安時代の方形周溝遺構2基、古墳時代終末～奈良時代の地下式土壇墓3基、時期等不明の溝2状、時期および性格不明の落ち込み11基等を検出した。特に1号方形周溝遺構とその埋葬施設や14・26・44の地下式改葬墓等は重要な成果である。

1～45号跡

1・2・4・6・9・10・12・15・16・19・32号跡は、平面形が不整でほぼ長楕円形を呈するもので、確認面からの深さも比較的浅いものが主体である。この内覆土が暗褐色土でやや堅く締まることなどの特徴から、1・2・6・12号跡が縄文時代早期に、またその可能性のある遺構に19号跡が上げられる。

21・23・29号跡は、縄文時代の炉穴である。29号跡は、3基の炉穴からなる。出土遺物には75～78・81～85の条痕文系の茅山式土器がある。

5・17・33・34号跡は、平面形がほぼ円形を呈するものである。この内5・17・33号跡は壁立ち上りの比較的急なもので、確認面からの深さ0.33～0.49mを測る。34号跡は、壁面および床面に凹凸のある船底型を呈し規則性に欠く。33号跡からは、深鉢形土器の底部と小型の有孔石棒を出土し、土壇墓として把握できるものである。また、所属時期は出土遺物から弥生時代中期と考えられる。

25・27・38・40号跡は平面形がやや縦長の隅丸長方形を呈し、平坦な底面の中央にはピットを有し、確認面からの深さ0.61～0.79mを測り、40号跡は2基が複合する。時期を示す出土遺物が無いが、覆土は締めりの良い暗黒褐色か黒色を呈することから、縄文時代早期に比定できようか。遺構の性格は、陥し穴とも考えられる。28・30号跡は、上記の土壇底面のピットを欠くだけで、覆土・形態等は限りなく5・17等の遺構に類似している。

8・18・37号跡は地下式土壇墓である。8号跡は、搬入部の堅坑と埋納部である袋状壁面および底面に僅かに段を残し、埋納部規模は、底面1.65×0.50m・高さ0.5mを測る。搬入部と埋納部の閉塞板は覆土堆積状況から可能である。18号跡は搬入部堅坑が二段に掘込まれ、埋納部底面に溝を有する。一部調査区域外にかかるため、底面溝は本来は2条を有しよう。規模も地下式土壇墓としては大きく、堅坑平面径は3.1×2.9m・深さ1.43m、埋納部長軸長は推定2.0m・短軸長0.8m・高さ0.6～0.8mと推定できる。37号跡は、堅坑掘込面規模は2.35×1.1mで二段を有し、埋納部規模は、底面1.86×0.37m深さ0.71m・高さ0.5m前後を測る。

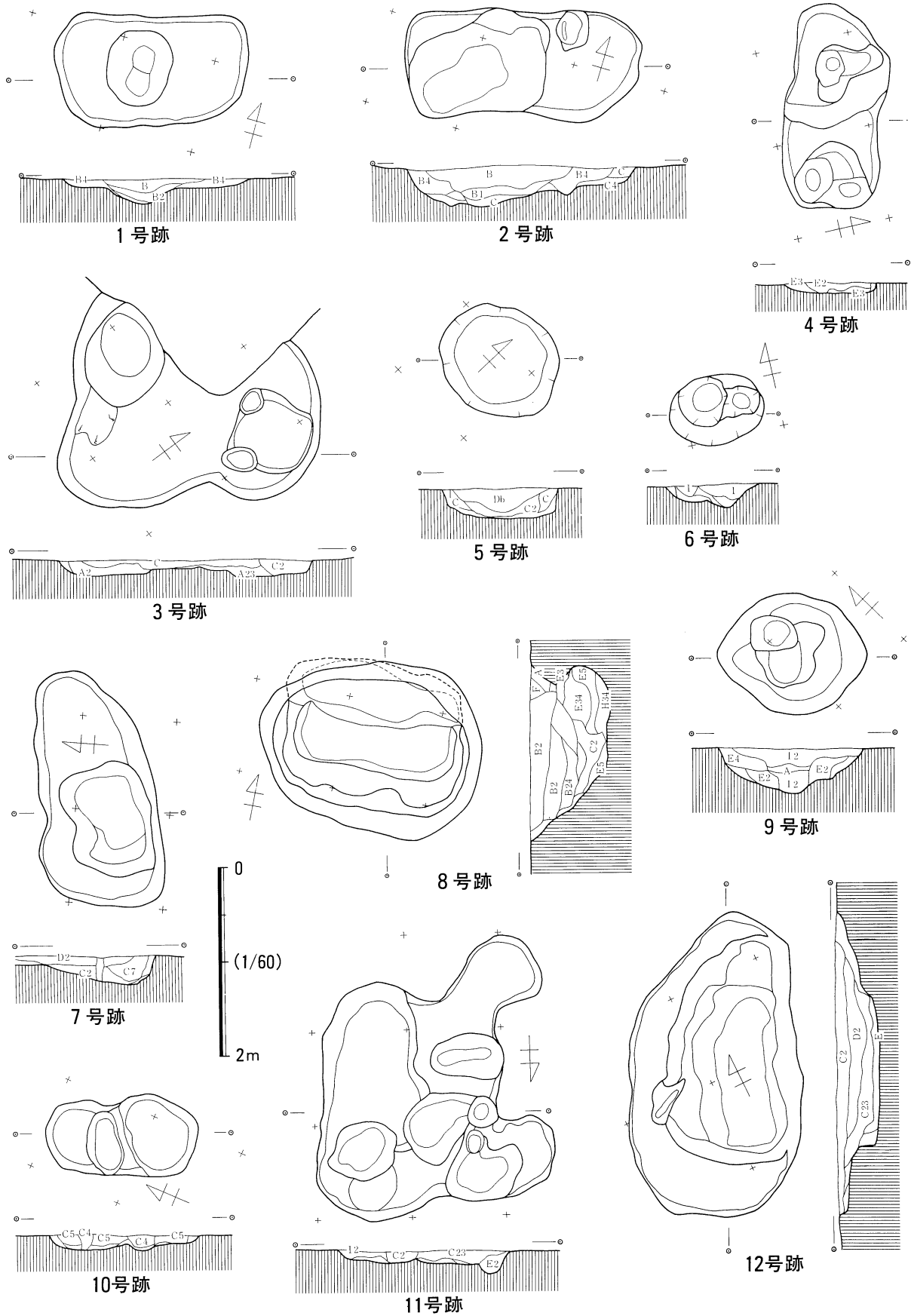
3・11・31・35・36・41・42・43号跡は、平面形が不整形を呈するものである。覆土等の状況から、3・11・31・35が縄文時代早期、36・41・42・43は時期の限定が不可能な遺構である。

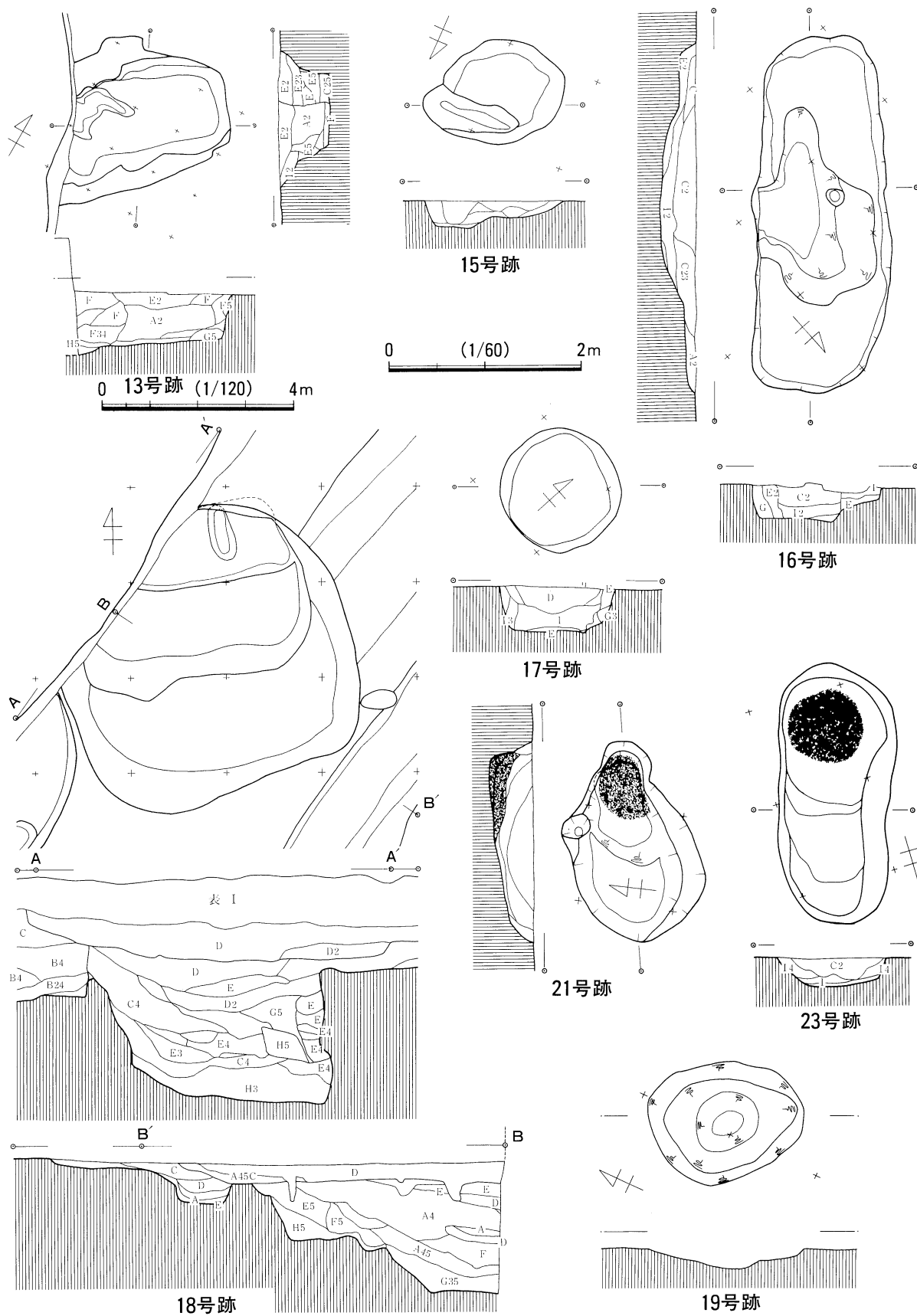
13号跡は南西半分が調査区域外にあるため平面・規模も不正確であるが、平面規模も3.3m以上×2.5mと大きく覆土はロームブロックを主体とし、出土遺物も無く時期限定が不可能である。

表1 1～45号跡 観察表

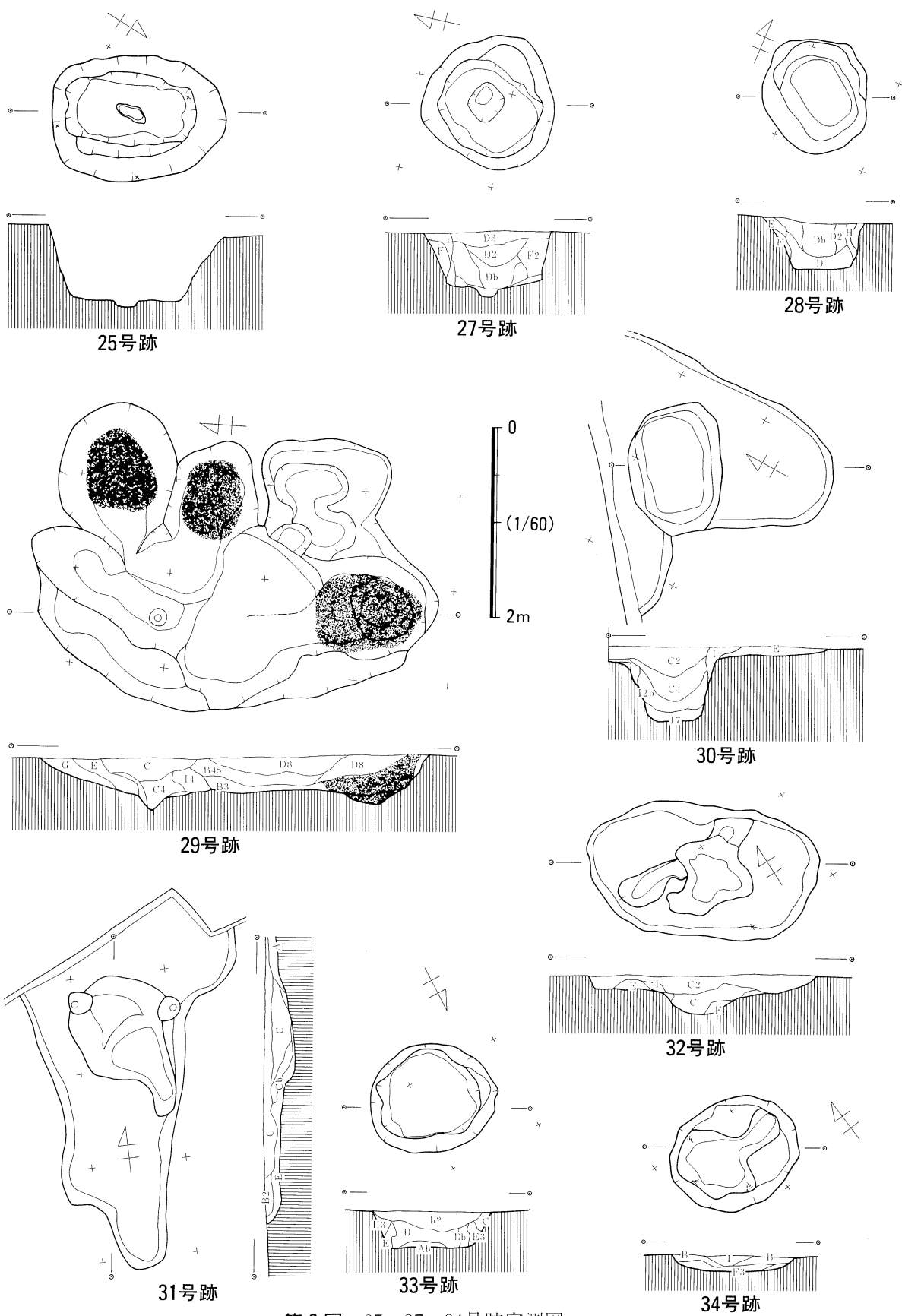
遺構番号	時期	性格	平面形	規模(m) 長軸×短軸	長軸方位	深さ(m) 最大値	特徴
1号跡	縄文時代 早期	不明	不整長楕円形	2.06×1.16	N-70.5°-W	0.24	覆土が硬く締まり、暗茶褐色土ブロックが混入する。床面中央に播鉢状の窪みを有する。出土遺物10・20・21
2号跡	縄文時代 早期?	不明	不整長楕円形	2.51×1.19	N-71°-W	0.36	1号跡同様の覆土状況を程する。床面に大きな窪みを有する。
3号跡	縄文時代 早期	不明	不整形	2.78×2.1+	N-53°-W	0.35	北半分を2号住居跡に掘り込まれる。床面はほぼ平坦であるが、窪みがある。
4号跡	不明	不明	不整長楕円形	2.15×1.02	N-16.5°-W	0.39	覆土はローム粒を含む黒褐色土が主体。床面凹凸がある。
5号跡	弥生時代 ?	土壇墓 ?	円形	1.32×1.15	N-2°-W	0.33	覆土は硬く締まる黒色土を主体とする。壁立ち上りは急である。床面は平坦。
6号跡	縄文時代 早期	不明	楕円形	1.02×0.69	N-86°-E	0.21	ピット状の遺構が2つ複合し、覆土が硬く締まった黒色土を主体とする。
7号跡	不明	不明	不整長楕円形	2.55×1.31	N-73.5°-W	0.21	覆土は黒褐色土にロームブロックを含む土層が主体である。中央に窪みを有する。
8号跡	古墳時代 後期～終末	地下式土壇墓	長楕円形	2.38×1.81	N-90°-W	0.85	長軸の北側壁面を袋状に掘り込み天井部を有する。有天井土壇墓とも呼称される。南側壁面には2段に階段状のテラスを有する。底面規模は1.65m×0.5mを測る。
9号跡	不明	不明	不整楕円形	1.58×1.28	N-43°-E	0.55	播鉢状の断面を程し、覆土は暗茶褐色土を主体に茶褐色土ブロックを混じる。
10号跡	不明	不明	不整長楕円形	1.60×0.88	N-25°-E	0.17	覆土は暗茶褐色を程する。底面には凹凸があり、壁の立ち上がりも緩やかである。
11号跡	縄文時代 早期	不明	不整形	3.40×2.52	N-41°-W	0.30	覆土は黒色土を主体とする。床面は平坦面と播鉢状の窪みとからなる。出土遺物-89他
12号跡	縄文時代 早期	不明	不整長楕円形	3.24×1.85	N-28°-W	0.50	覆土は黒色土と暗黒褐色がレンズ状に堆積する。2段の掘り込みがあり、上面は緩やかで、下段はやや急な壁面である。出土遺物-3・4・14・23・24・42他
13号跡	不明	不明	長方形	3.9+×2.6	N-50°-W	1.21	西側が調査区域外にある。壁立ち上がりは垂直ぎみ。覆土はローム土・ロームブロックの混入が多く、暗茶褐色を主体とする。
14号跡	奈良～平安	地下式改葬墓	竪坑-D形 玄室-方形	1.39×1.21 0.75×0.68	N-27°-W	0.68	竪坑と地下式の玄室とから成る。竪坑掘り込みは玄室側が垂直に、入口側が斜めである。玄室は床面は平坦で、天井はアーチ型を程する。玄室内には白色粘土製の埴輪の器があり、中には火葬骨が納られていた。
15号跡	不明	不明	不整形	1.49×1.09	N-55°-W	0.30	覆土は黒褐色土を主体とする。壁は緩やかな立ち上がりで、床は凹凸がある。
16号跡	不明	不明	長方形	3.73×1.40	N-40°-W	0.37	覆土は黒褐色土を主体とする。底面に2段の掘りする。出土遺物29番
17号跡	弥生時代 ?	土壇墓 ?	円形	1.31×1.28	N-46°-W	0.49	覆土は黒色土を主体とする。壁は垂直に近く急である。底面は平坦である。
18号跡	古墳時代 ～奈良	地下式土壇墓	隅丸方形	3 × 3.04	N-8°-E	1.43	北東隅は調査区域にある。1号溝に掘り込まれる。天井部は落下し、僅かに袋状を程する。竪坑は2段に掘られ、底面には溝を検出する。底面規模は西半分が調査区域外にあり、約2×0.8mを測る。
19号跡	縄文時代 ?	不明	倒卵形	1.60×1.25	N-35°-E	0.23	断面播鉢状を程する。覆土は黒褐色土を主体とする。

遺構番号	時期	性格	平面形	規模(m) 長軸×短軸	長軸方位	深さ(m) 最大値	備考
21号跡	縄文時代 早期	炉穴	不整楕円形	2.11×1.33	N-73.5°-W	0.43	炉跡が僅かに突出し、床面に段を有する。焼土は20cmほどの堆積がある。
22号跡	縄文時代 中期	埋甕		0.47×0.42		0.3	底部を欠く深鉢を埋め込み、土器底部で蓋をしている。出土遺物92~96
23号跡	縄文時代 早期	炉穴	長楕円形	2.69×1.24	N-15°-W	0.35	壁立ち上りは緩やかで、焼土堆積は15cmを測る。
25号跡	縄文時代 早期?	不明	不整楕円形	1.81×1.33	N-33°-E	0.75	壁立ち上りは急。底面に深さ7cmほどのピットを有する。
26号跡	奈良~平安	地下式改葬墓	竪坑一楕円 玄室一不整	2 × 1.47 0.62×0.52	N-19.5°-E	0.92	竪坑と地下式玄室とからなる。竪坑は立ち上りは急で、床面には凹凸がある。玄室は不整形で造りは良くない。玄室内には骨粉の痕跡すらない。出土遺物は須恵器高台付杯片1点152
27号跡	縄文時代 早期?	不明	不整円形	1.4 × 1.4	N-32°-W	0.61	覆土は黒色土を主体とし、硬く締る。壁は急な立ち上がりである。底面は中央がやや窪み、中央には深さ10cmほどのピットを有する。出土遺物25
28号跡	縄文時代	不明	不整円形	1.25×1.1	N-52°-E	0.56	覆土は硬く締りの良い黒色土を主体とする。壁は急な立ち上がりで、底面は平坦である。遺物46
29号跡	縄文時代 早期	炉穴	不整形	4.20×2.86		0.7	3基の炉穴の集合からなる。炉跡主軸方位は、N-167°-S・N-109°-S・N-81°-Wを指向する。出土遺物は39・51・72・75~78・81~85
30号跡	縄文時代 早期?	不明	楕円形	1.34×0.98	N-55°-W	0.8	土壌周辺に落ち込状構構がある。壁は急な立ち上がりで、床は平坦で硬い。覆土は暗黒褐色土を主体に締りがよい。
31号跡	縄文時代 早期	不明	不整形	3.84×2.82	N-1°-W	0.33	覆土は締りのよい暗黒褐色土を主体に暗茶褐色土ブロックを含む。底面はほぼ平坦で、中央に落ち込みがある。
32号跡	不明	不明	長楕円形	2.38×1.41	N-44°-W	0.38	覆土は黒褐色土を主体とする。壁立ち上りは緩やかで、底面中央に落ち込みを有する。
33号跡	弥生時代 中期?	墓壇	円形	1.3 × 1.13	N-62°-W	0.42	覆土は締りの良い黒色土を主体とする。底面は比較的平坦である。出土遺物は有孔石棒と土器底部の149・150がある。
34号跡	不明	不明	円形	1.36×1.15	N-67°-E	0.2	覆土は黒褐色土を主体とする。底面には凹凸があり軟弱である。
35号跡	縄文時代	不明	不整形	2.76×1.7	N-31°-W	0.39	覆土は暗黒褐色土を主体とする。2個の円形土壇が複合した状況を示す。
36号跡	不明	不明	不整形	3 × 1.46	N-83°-W	0.28	覆土は黒褐色土と茶褐色土を主体とする。底面は凹凸があり、壁も緩やかである。
37号跡	古墳時代 後期~終末	地下式土壇墓	長楕円形	2.35×1.21	N-5°-W	0.71	長軸の西壁を袋状に僅かに掘り込み天井を造り出している。竪坑2段の階段状の堀方が見られる。底面規模は1.86×0.37を測り、細身である。
38号跡	縄文時代	不明	隅丸長方形	1.66×1.18	N-1°-W	0.77	覆土は暗黒褐色土を主体とする。壁は急に立ち上がり、底面は平坦で中央に深さ10cmほどのピットを有する。
40号跡	縄文時代	不明	隅丸長方形 不整円形	1.20×0.93 1.25×1.15	N-51°-W N-41°-E	0.79 0.77	2つの土壇が複合する。いずれも覆土は暗黒褐色土を主体とし、硬く締まりが良い。底面はほぼ平坦で、それぞれ中央に深さ10~15cmのピットを有し、壁も急である。
41号跡	不明	不明	不整形	1.74×1.31	N-55°-E	0.59	覆土は黒褐色土を主体とする。壁も均一ではなくみだれている。
42号跡	不明	不明	不整形	1.82×1.42	N-34°-E	0.6	覆土は黒褐色土を主体とする。断面船底形を程するが、底面は軟弱である。
43号跡	不明	不明	不整形	2.8 × 2.2	N-59°-E	0.39	覆土は黒褐色と茶褐色土を主体とする。底面は凹凸があり、壁も緩やかな立ち上りである。
44号跡	奈良~平安	地下式改葬墓	楕円形	1.14×0.9	N-13.5°-E	0.70	竪坑と玄室とからなる。竪坑底面は2段に掘られる。玄室は小型で奥行0.45m・幅0.41mを測る。出土遺物はない。
45号跡	縄文時代	集石		0.4 × 0.37		0.55	僅かな堀方を有し、10cm前後のやや大きめな石(97~99)が置かれていた。

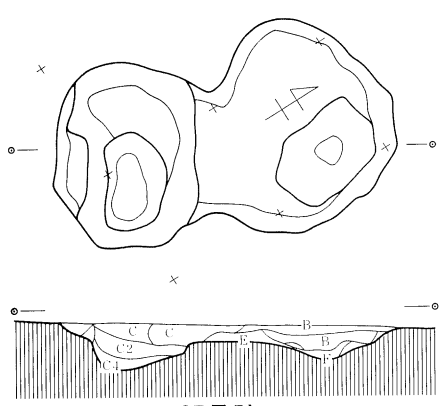




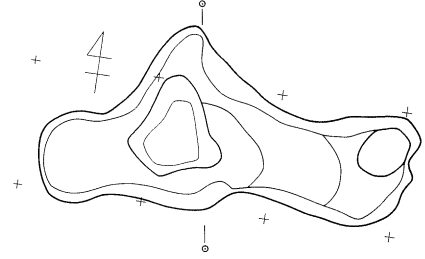
第5图 13·15~19·21·23号迹实测图



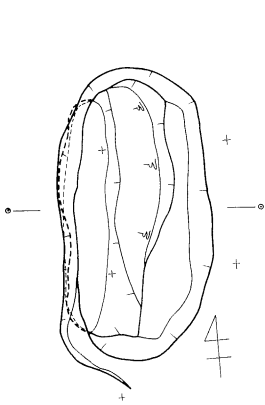
第6图 25·27~34号迹实测图



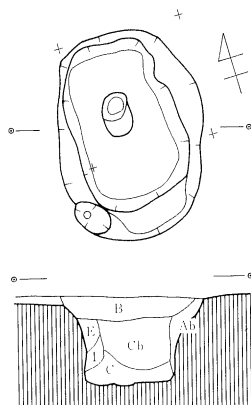
35号迹



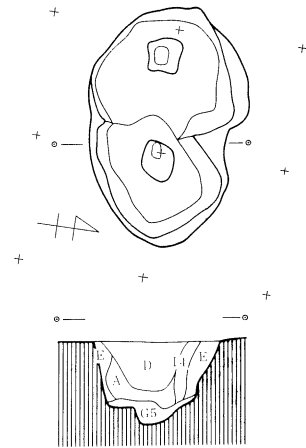
36号迹



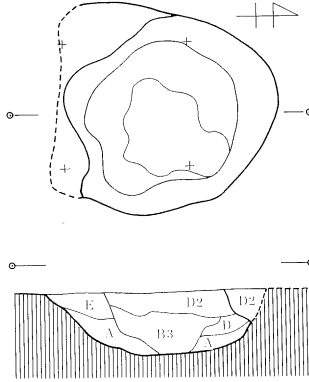
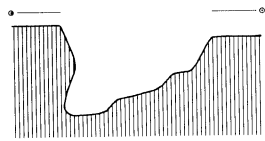
37号迹



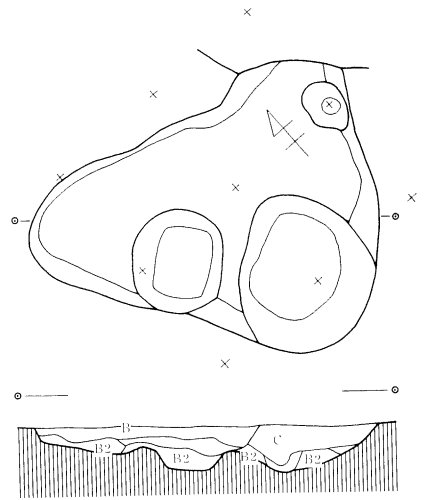
38号迹



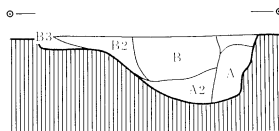
40号迹



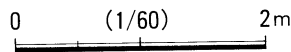
42号迹



43号迹



41号迹



第7图 35~38·40~43号迹实测图

22号跡は、縄文時代中期（加曾利E4）の埋甕遺構である。出土遺物には、92～95がある。45号跡は、大きさの揃った擦り石3個からなる集石遺構である。僅かに掘り方を検出し、規模は0.4×0.34mを測る。

竪穴住居跡

1号住居跡 床面平面規模5m強を測り、ほぼ正方形を呈する。床面北西にL字型のベット状遺構、竈右に長方形の貯蔵穴を有する。床面は中央部が硬く踏み締められるほかは軟弱である。竈は北壁中央に付設され、煙道部も僅かに突出するだけである。支柱穴は4本で、壁溝は検出されない。出土遺物は、100～107である。

2号住居跡 床面平面規模5m弱を測り、主軸を短軸に置き、平面形はほぼ正方形を呈する。支柱穴4の他に出入口施設に伴うピット1を検出する。竈は北壁中央よりやや右に寄り、貯蔵穴は北東隅に付設される。床面は、中央から竈付近が硬いが相対的に軟弱である。壁溝は、貯蔵穴を意識するように北東隅付近にのみある。出土遺物は、108・109である。

3号住居跡 床面平面規模5m弱を測り、主軸を長軸に置き、平面形はほぼ正方形を呈する。竈は、東壁中央に付設され、煙道部突出長0.25mを測る。壁溝は、四周する。支柱穴は4本を基本とするが、北東隅・北西隅と南床面にやや深めのピットを備えている。出土遺物は、110～114がある。

4号住居跡 床面平面規模5m弱を測り、主軸を短軸に置く。平面形はほぼ正方形を呈し、支柱穴は4本である。竈は北壁中央寄りやや東に付設され、煙道部は僅かに突出するだけである。壁溝は無く、床面も相対的に軟弱である。出土遺物は、115～119がある。

5号住居跡 床面平面規模4.6～4.8mを測り、主軸を長軸に置く。平面形は楕円形を呈し、支柱穴4本で、入口施設用のピットを有する。床面は全体に硬く締まっている。床面北側に炉跡を有する。また床面に焼土が点在し、火災住居跡であろうか。出土遺物は、120～125がある。

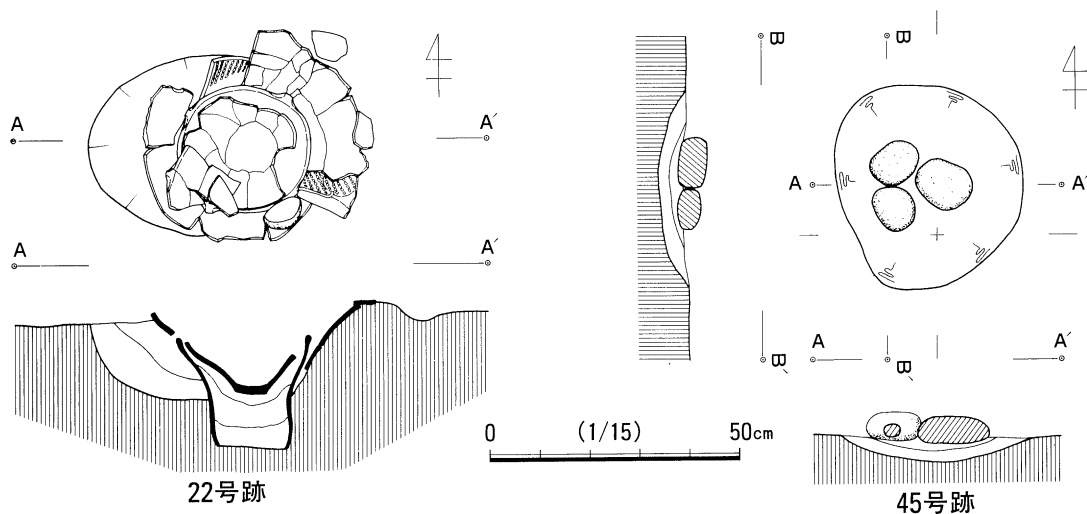
6号住居跡 床面平面規模3.1～3.5mを測り、主軸を短軸に置く。平面形は横長の楕円形を呈し、無柱穴である。床中央寄りやや北側に炉を有し、南壁中央部に地山を掘残した階段状の入口施設を有する。床面は全体に硬く踏み締められている。出土遺物は、126～132。

7号住居跡 床面平面規模4m強を測り、主軸を長軸に置く。平面形はほぼ正方形を呈し、支柱穴は不規則に付設されている。竈は北壁中央に付設され、左袖部からは良好な状態で甕等を出土する。壁溝は竈反対方向の入口施設が想定される付近で途切れる他は四周し入口施設用のピットを、また竈右側に円形で摺鉢状の貯蔵穴を有する。床は、中央部が硬く踏み締められるだけである。2号方形周溝遺構と複合するが、2号方形周溝より古い。出土遺物は、133～140がある。

8号住居跡 全体の四分の一の検出で他は調査区域外にまたがり、1号溝に掘込まれる。竈が北壁中央に付設されていると想定すると、床面平面規模一辺4.8mと復元できる。支柱穴は1個のみで、検出位置から察すると本来は4穴となろう。壁溝は部分的に検出される。出土遺物は141。

9号住居跡 掘込面が浅く床面のみを検出であるが、平面形規模3～3.2mほどを測り、平面形は隅丸方形を呈する。床面中央やや北側に炉を有するのみで他の施設は付設されない、床面は中央がかすかに踏み締められているだけで軟弱である。出土遺物は142がある。

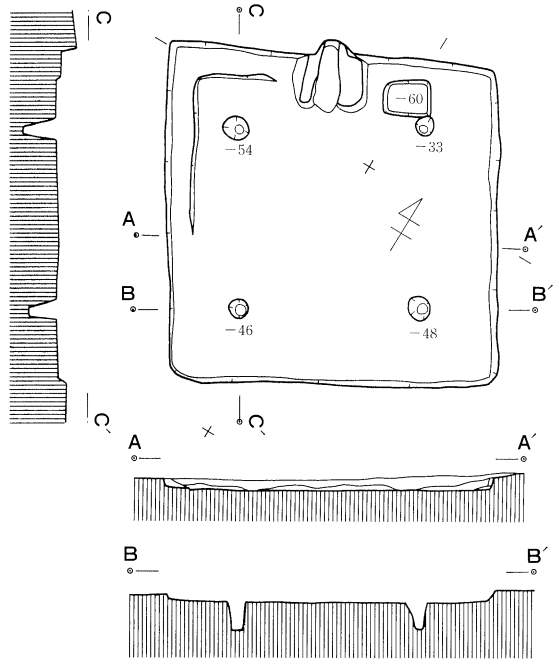
10号住居跡 床面平面規模5.2～5.6mを測り、主軸を長軸に置き、平面形はほぼ方形を呈する。支柱穴は4穴を有し、壁溝は検出されない。竈は東壁中央寄りやや右に付設され、右袖部に接し甕・甗



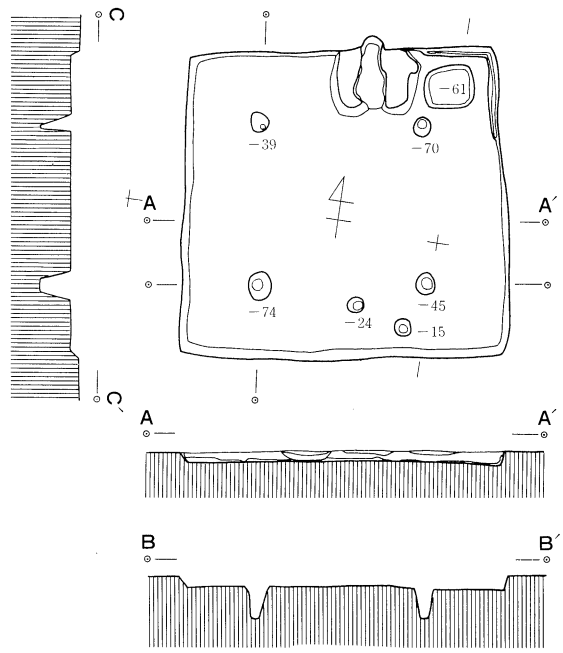
第8図 22・45号跡実測図

表2 1～12号住居跡 観察表

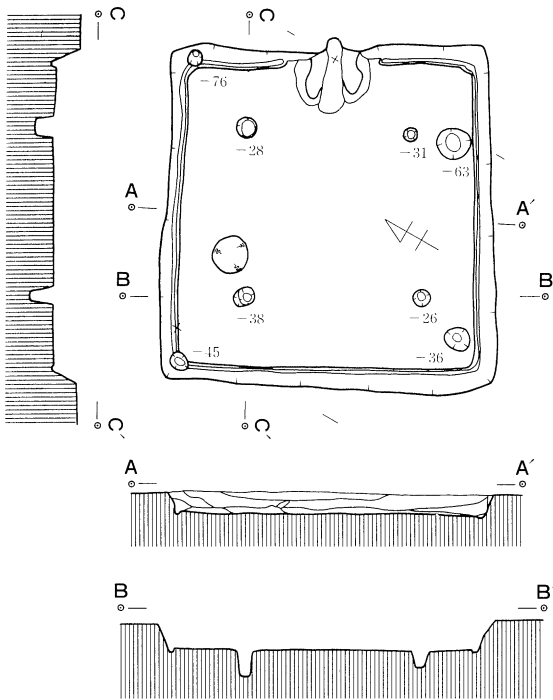
住居番号 挿図番号	時期	平面形	規模(m) 確認面の規模 床面の規模	主軸方位 主軸方向	深さ (cm)	主柱穴 の数	カマド・ 炉跡の位置	壁溝の 有無	備考
1号住居	古墳時代 後期	方形	5.35×5.32 5.07×5.04	N-30.5°-E 長軸	12~25	4	北辺中央	無	カマド右側に貯蔵穴。床面北西にL字状に段を有する。
2号住居	古墳時代 後期	方形	5.10×4.94 5.01×4.68	N-9.5°-E 短軸	15~21	4	北辺部や 東寄り	北東隅のみ	カマド右側に貯蔵穴。入口施設に伴うピットあり。
3号住居	古墳時代 後期	方形	5.35×5.22 4.90×4.82	N-61°-W 長軸	32~36	4	東辺中央	全周	北・西・南隅にピットを有する。火災住居の可能性あり。
4号住居	古墳時代 後期	方形	5.06×4.98 4.90×4.72	N-3°-E 短軸	28~30	4	北辺部や 東寄り	無	火災住居跡の可能性あり。
5号住居	弥生時代 後期	楕円形	5.10×4.84 4.58×4.80	N-1.5°-W 長軸	35~37	4	北側床面 (炉)	無	覆土中に焼土及び炭化物を多量に検出し、火災住居跡である。入口施設に伴うピットあり。
6号住居	弥生時代 後期	楕円形	4.0×3.46 3.54×3.12	N-3.5°-W 短軸	27~30	無	北側床面 (炉)	無	東壁からピット1を検出するが主柱穴の可能性はなく、無柱穴である。南壁に地山を掘り残した、入口施設がある。
7号住居	古墳時代 後期	方形	4.48×4.40 4.16×4.20	N-55°-E 長軸	21~28	?	北西辺部 中央	東南辺中央 以外全周	ピット4を検出するが主柱穴としては認めがたい。入口施設ピットあり。カマド北側に円形の貯蔵穴ピットあり。
8号住居	古墳時代 後期	方形	?×(4.8) ?×2.5+	N-8°-E 長軸	10~35	4?	北辺中央	無	南西側の?が調査区域外にあり、1号溝に掘り込まれる。
9号住居	弥生時代 後期	不整楕円形	3.28×? 3.24×3.06	N-18°-W 長軸	0~7	無	床面中央 北側(炉)	無	床面と一部の壁のみ検出
10号住居	古墳時代 後期	方形	5.90×5.48 5.6×5.18	N-80°-W 長軸	26~32	4	東辺部中央	無	カマド右裾部より甕3・甕1を検出する。
11号住居	弥生時代 後期?	楕円形?	?×4+ 不明	? 長軸	30	?	?	無?	南東プランのみの検出で、他は調査区域外にある。
12号住居	弥生時代 後期?	楕円形?	3.9×? 3.65×?	N-31°-E 短軸	26~32	無	床面北東 (炉)	無	1号溝に北側を大きく掘り込まれる。



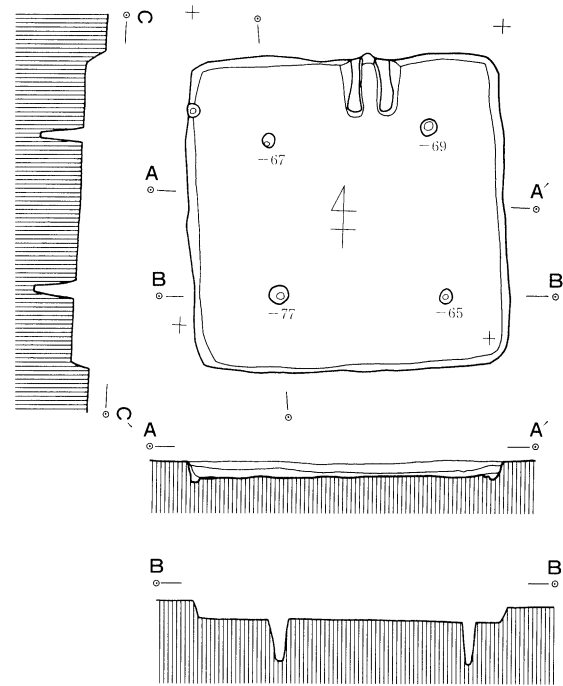
1号住居跡



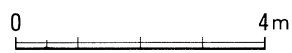
2号住居跡



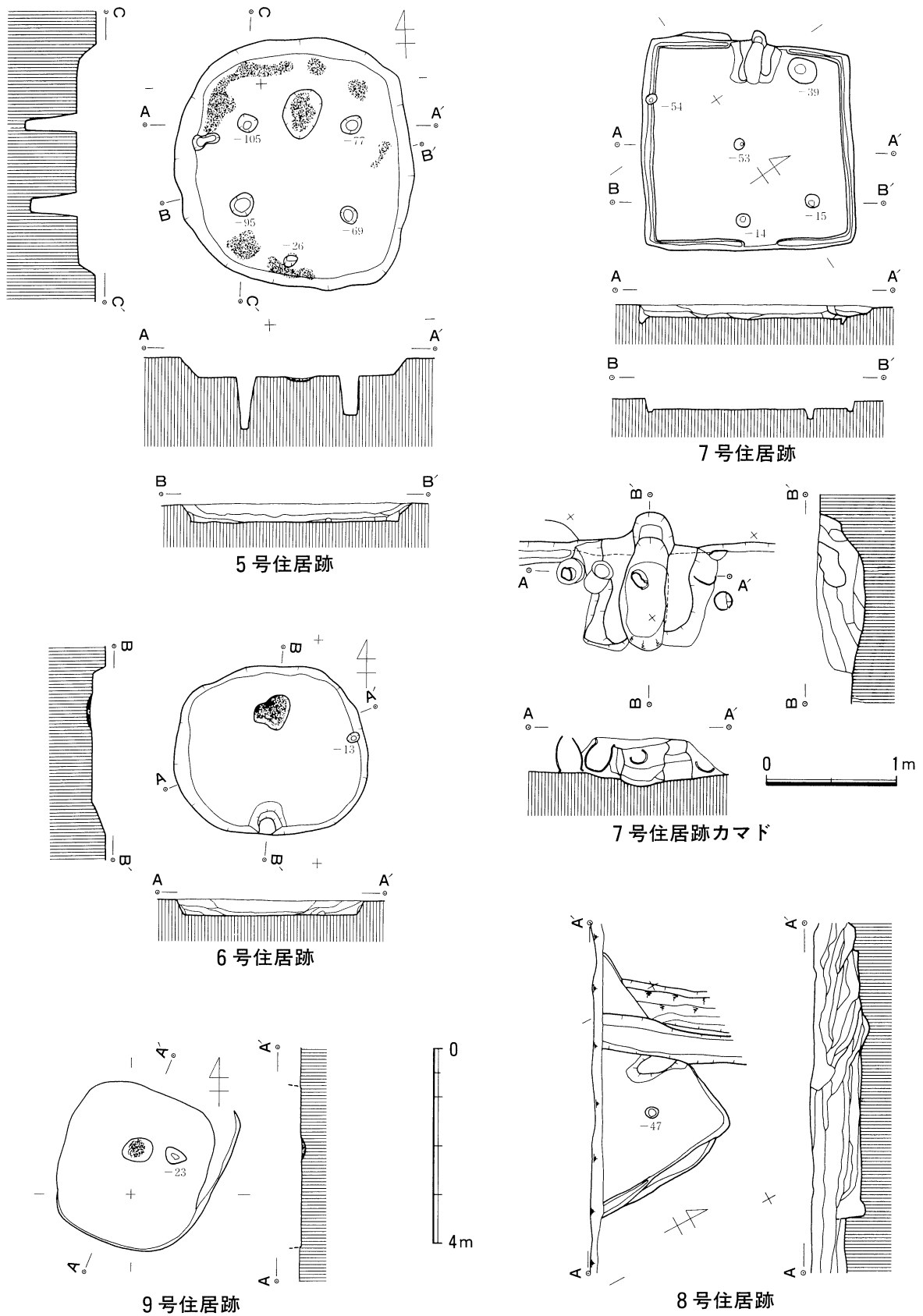
3号住居跡



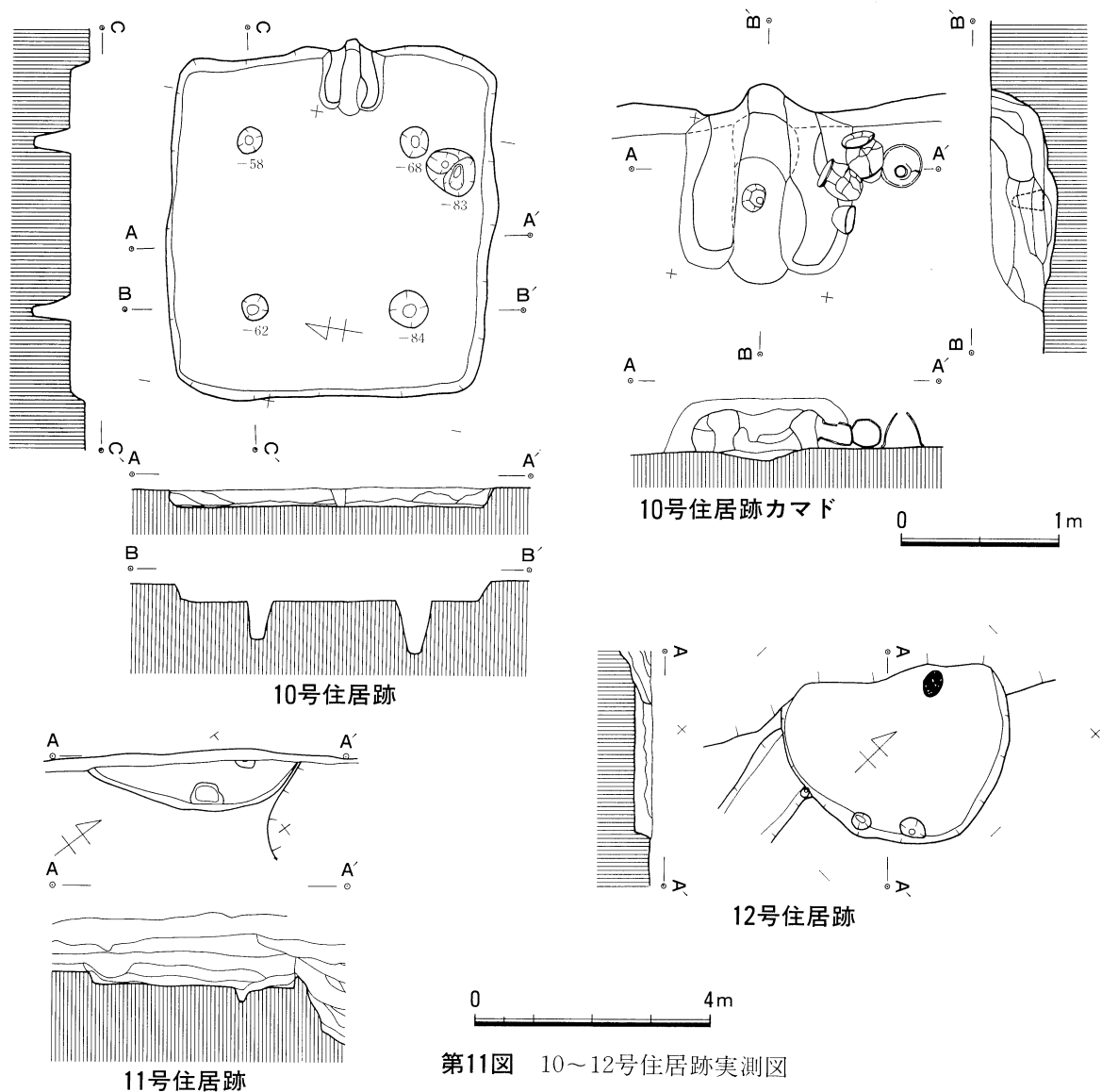
4号住居跡



第9图 1~4号住居跡実测图



第10図 5～9号住居跡実測図



第11図 10～12号住居跡実測図

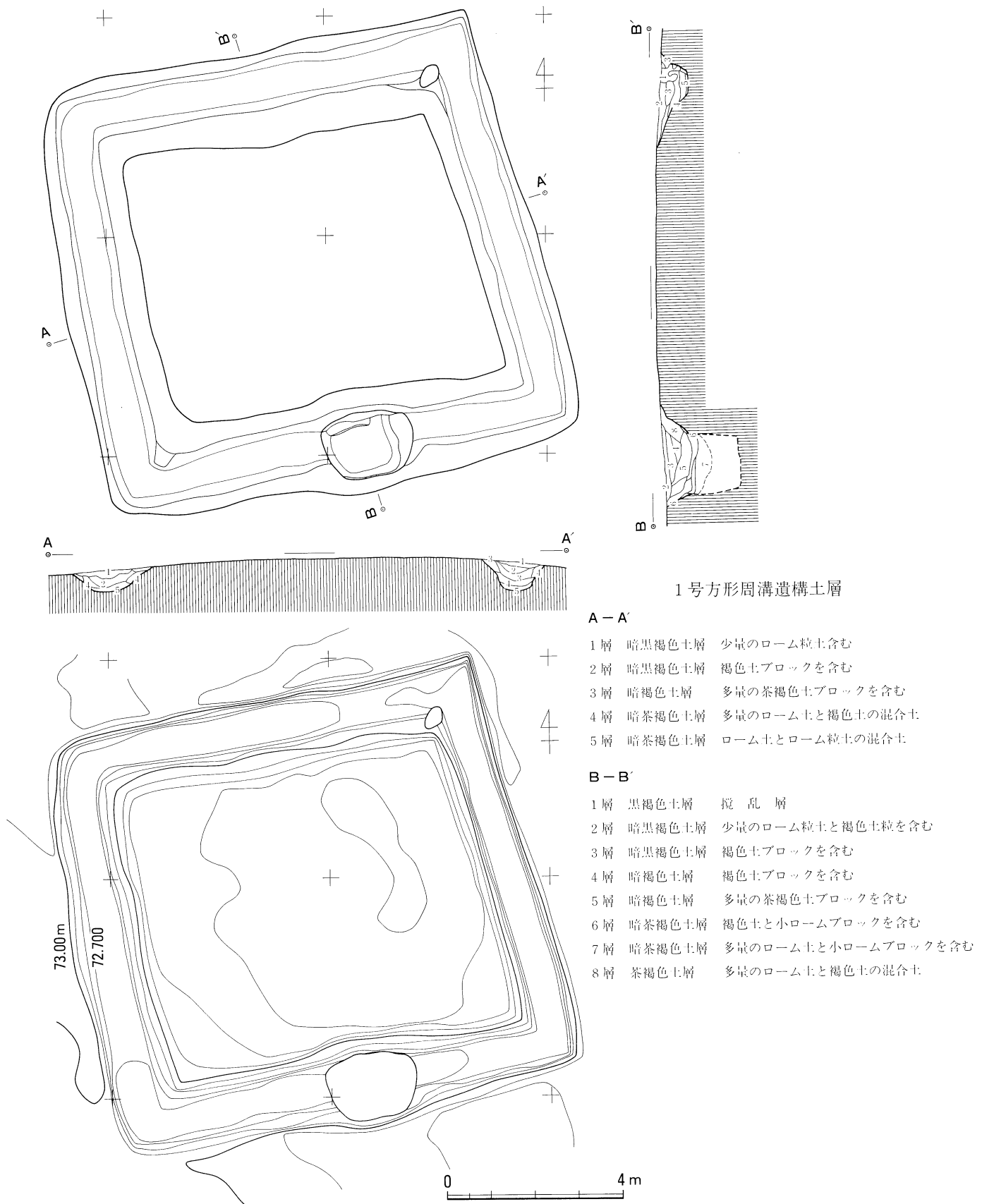
等を出土する。床面は中央から竈にかけて踏み締められるだけで全体に軟弱である。出土遺物は143～148。

11号住居跡 大半が調査区域外に有り部分的な検出である。壁溝は無く、支柱穴1と胞衣ピット1を検出するのみである。

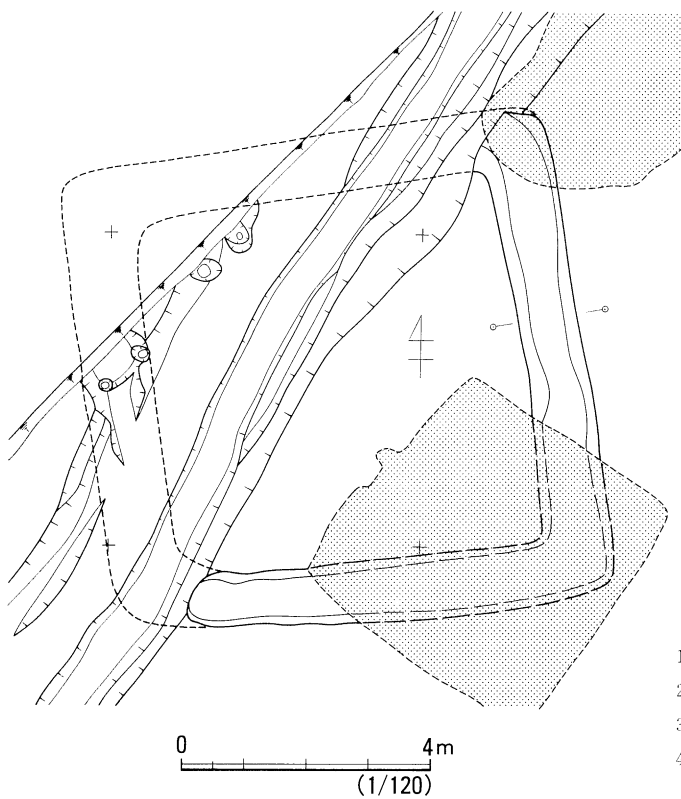
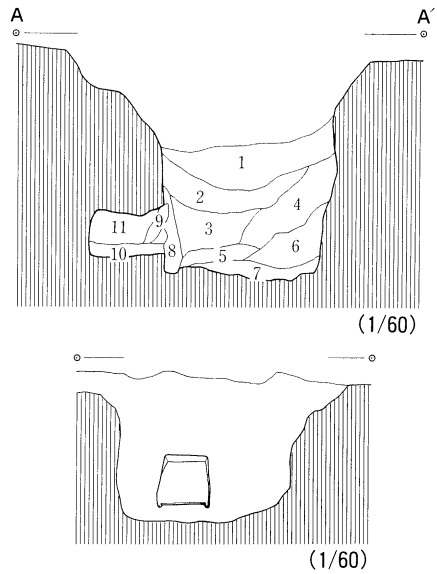
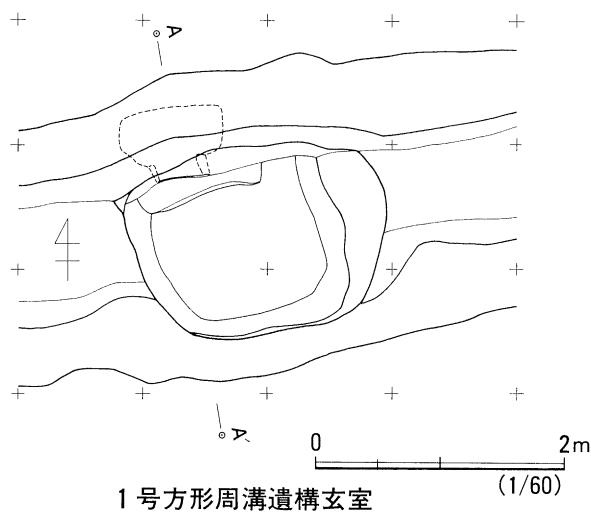
12号住居跡 プラン北西三分の一を1号溝に掘込まれ、平面形は横長の楕円形を呈する。床面平面規模は長軸3.6mを測り、主軸方向は短軸にある。壁溝・支柱穴とも検出されない。炉は床面北にある。炉と反対側位置に、ピット2個を検出する。床面は中央部が特に踏み締められ硬く全体に硬質である。

方形周溝遺構

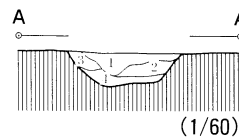
1号方形周溝遺構 調査区南端から検出する。主軸方位N-11°-Wを指向する。周溝下底間長さ南北7.7m・東西8.6m、周溝外形長南北10m・東西10.8mをそれぞれ測る。埋葬施設には、地下式改葬墓を有する。周溝は堀込み面幅・底幅・深さとも、南溝1.6m・0.75m・0.67m、北溝1.3m・0.7m・0.6m、東溝1.15m・0.6m・0.5m、西溝1.35m・0.6m・0.5mをそれぞれ測り、周溝断面形は比較的整った逆台形を呈する。地下式改葬墓は南溝中央部に竪坑を有し、竪坑は短径1.5m・長径2.05m・周溝底面からの深さ1.1mを測る。壁は垂直に立ち上がり、東壁面のみがやや緩やかな段を有している。これは埋納部搬入が南溝東側周溝内から行われたことを示唆するものである。竪坑方台部側壁面は、



第12図 1号方形周溝遺構実測図



- | | | |
|-----|--------|--------------------------|
| 1層 | 暗茶褐色土層 | 多量のローム土・小ロームブロック・黒褐色土混泥土 |
| 2層 | 暗茶褐色土層 | 多量の黒褐色土に小ロームブロック・ローム土を含む |
| 3層 | 茶褐色土層 | ローム土に褐色土・小ロームブロックの混泥土 |
| 4層 | 暗茶褐色土層 | 褐色土にローム土・小ロームブロック含む |
| 5層 | 暗茶褐色土層 | ロームブロック・ローム土の混泥土 |
| 6層 | 暗茶褐色土層 | 大ロームブロックと小ロームブロックの混泥土 |
| 7層 | 暗茶褐色土層 | ロームブロック土 |
| 8層 | 暗黒褐色土層 | ローム粒土と褐色土を混入し、やわらかい |
| 9層 | 暗黒褐色土層 | 褐色土とローム粒土の混泥土で、やわらかい |
| 10層 | 黒褐色土層 | 火葬骨粒を含む、有機質土 |
| 11層 | 空洞 | |

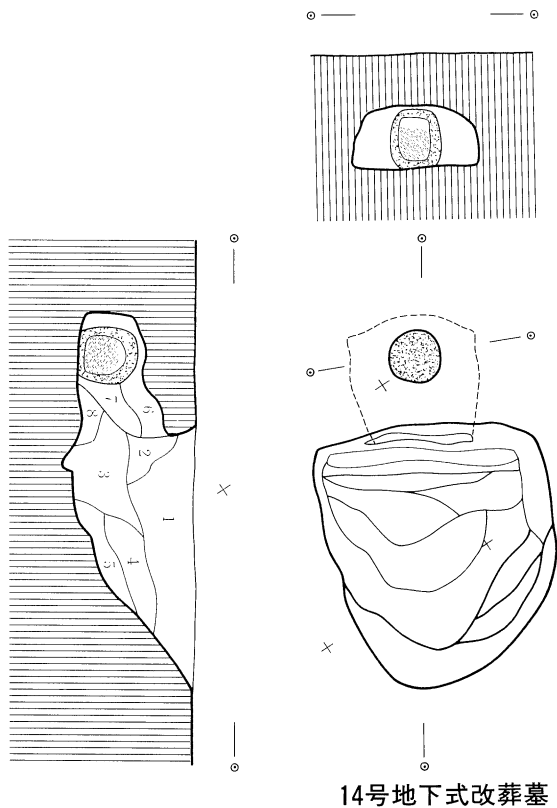


- | | | |
|----|--------|------------------|
| 1層 | 黒褐色土層 | 褐色粒とローム粒含む |
| 2層 | 暗黒褐色土層 | 小褐色ブロック・ローム粒含む |
| 3層 | 暗黒褐色土層 | 茶褐色土ブロック・ローム粒混泥土 |
| 4層 | 黒褐色土層 | 多量のローム粒含む |

2号方形周溝遺構 第13図 1号方形周溝遺構玄室・2号方形周溝遺構実測図

特に丁寧に削り仕上げられる。埋納部である玄室入口は、この壁面左下に穿たれ、入口は高さ0.4m・幅0.34~0.42mを測り、両側壁には水抜き溝が付設される。竪坑と埋納部は、竪坑方台部側壁面直下に付設された溝により閉塞板の存在を明瞭にし、この閉塞板によって仕切られる。このことは、竪坑土層断面からも明らかである。埋納部天井はアーチ型を呈し、平面形は横長の隅丸長方形で、規模は0.85m×0.42mである。埋納部内には炭とともに火葬骨が検出される。出土遺物は、周溝北東隅覆土土層から灰釉壺を出土するのみである。

2号方形周溝遺構 1号溝・7号住居跡と複合し、一部調査区域外にある。溝のみの検出で、溝幅0.98~1.1m・深さ0.25m前後を測り、平面規模は推定で周溝下底間南北長6.4m・東西長6.2mである。



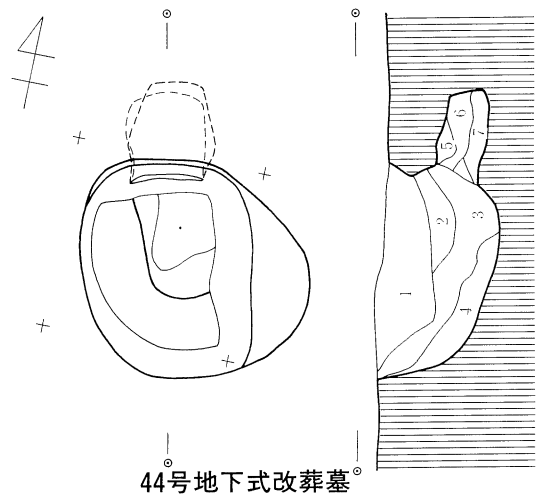
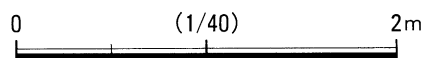
14号地下式改葬墓

14号地下式改葬墓土層

- | | | |
|----|--------|--------------------|
| 1層 | 暗黒褐色土層 | 少量の褐色土を含む |
| 2層 | 暗黒褐色土層 | 多量のローム粒と褐色土を含む |
| 3層 | 暗黒褐色土層 | 多量の褐色土ブロックを含む |
| 4層 | 暗褐色土層 | 少量の褐色土ブロックとローム粒を含む |
| 5層 | 暗褐色土層 | 多量のローム粒と褐色土ブロックを含む |
| 6層 | 暗褐色土層 | ボソボソな褐色土とローム粒土混合土 |
| 7層 | 暗黄褐色土層 | ロームブロックと褐色ブロックの混合土 |
| 8層 | 褐色土層 | ローム粒土と褐色土の混合土 |

26号地下式改葬墓土層

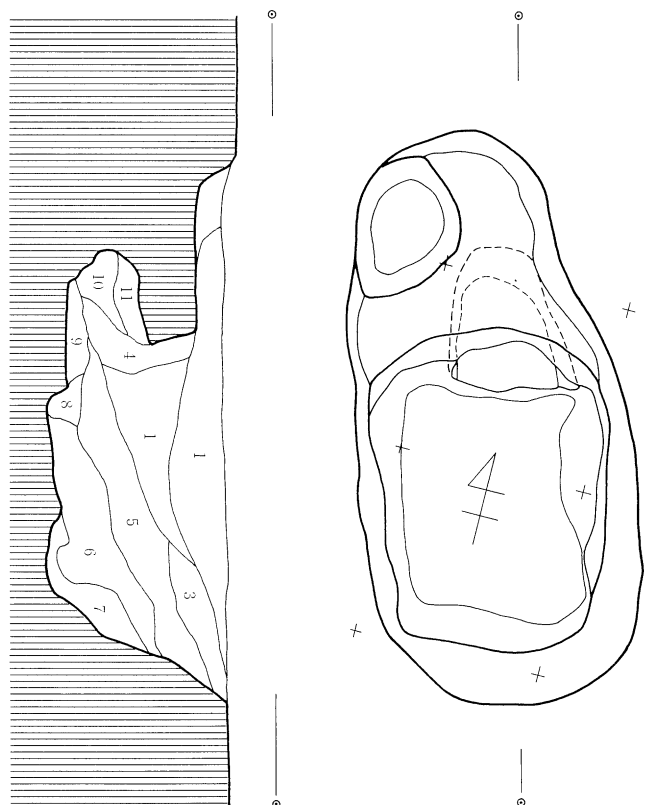
- | | | |
|-----|--------|-------------------------|
| 1層 | 黒色土層 | 多量のローム粒 |
| 2層 | 暗黒褐色土層 | 黒色土と少量の褐色土の混合土 |
| 3層 | 暗黒褐色土 | 2層に多量のローム粒を含む |
| 4層 | 暗茶褐色土 | 軟質のローム土と黒褐色土の混合土 |
| 5層 | 暗褐色土 | 多量のローム粒を含む |
| 6層 | 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒・褐色土を含みやや硬い |
| 7層 | 暗黄褐色土層 | ボソボソで大きなロームブロック土 |
| 8層 | 暗茶褐色土 | ロームブロック・ローム粒混入 |
| 9層 | 暗茶褐色土 | 多量のローム粒を含む |
| 10層 | 暗茶褐色土 | ボソボソな褐色土とローム土の混合土 |
| 11層 | 暗茶褐色土 | ローム粒土 |



44号地下式改葬墓

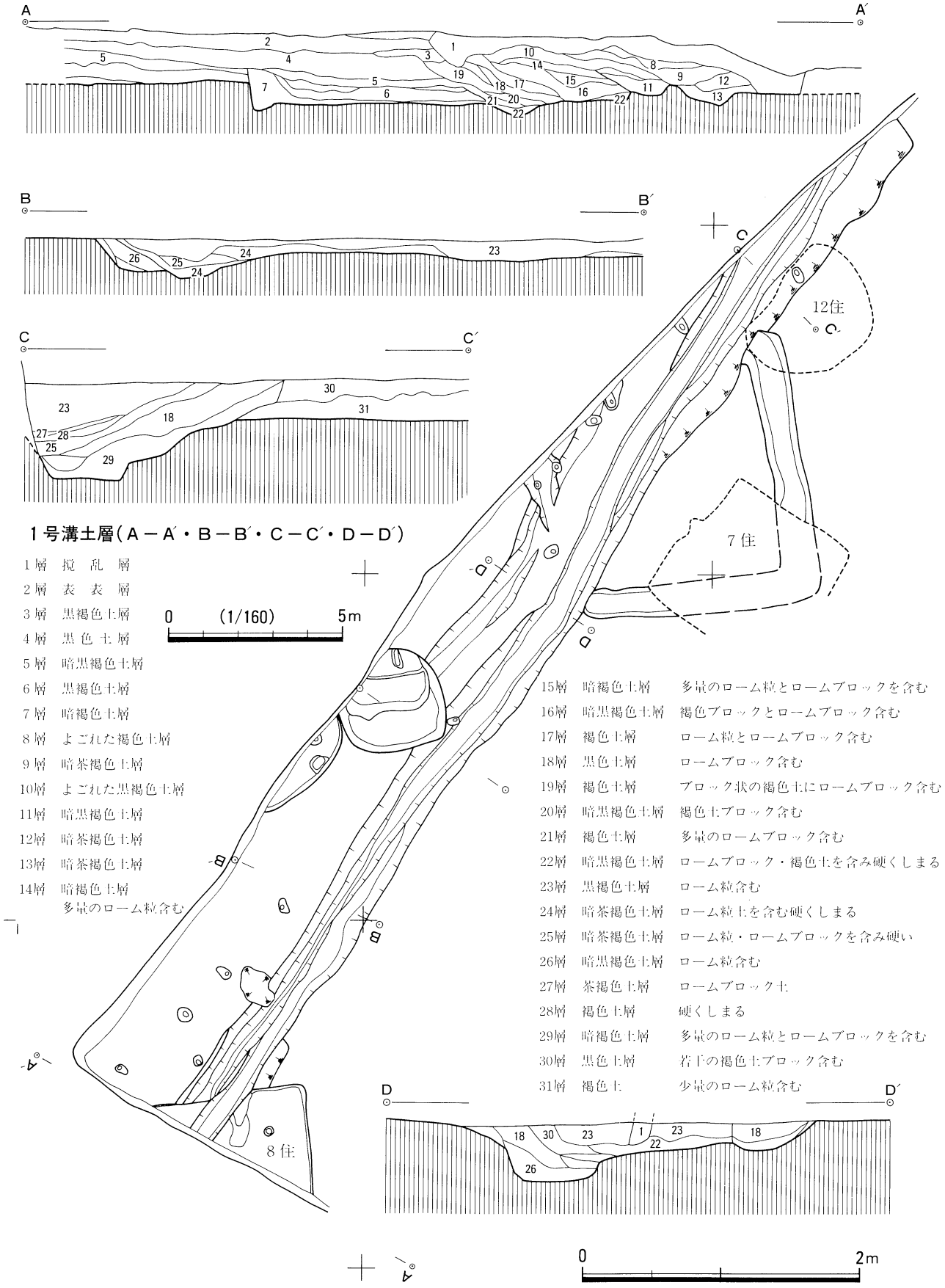
44号地下式改葬墓土層

- | | | |
|----|--------|--------------------|
| 1層 | 黒色土層 | 少量のローム粒を含む |
| 2層 | 暗黒褐色土層 | 褐色土ブロック含む |
| 3層 | 暗黒褐色土層 | 多量の褐色土ブロックとローム粒を含む |
| 4層 | 暗褐色土層 | 多量のローム粒土を含む |
| 5層 | 暗褐色土層 | ボソボソな褐色土にローム粒を含む |
| 6層 | 暗茶褐色土層 | ロームブロックと褐色土の混合土 |
| 7層 | 暗茶褐色土層 | ローム粒と褐色土の混合土 |



26号地下式改葬墓

第14図 14・26・44号地下式改葬墓



第15図 1号溝実測図

14・26・44号地下式改葬墓

14号跡 竪坑・玄室とも小型の地下式改葬墓である。竪坑は、緩やかな段を有しながらスロープ状に構築され、玄室寄り最も深く、閉塞板の存在を示すかのように溝を有する。玄室と竪坑間には段差を有し玄室側がやや高い位置に床面を置く。玄室搬入口と玄室は連続し一体となり、奥壁のやや膨らんだ方形を呈する。天井状部は蒲鉾状のアーチ型を呈し、奥行0.75m・横幅0.68m・高さ0.33mを測る。玄室内には、下末吉層の混在する粘土製の毬状の器が置かれ、中には火葬骨が納められている。

26号跡 竪坑は主軸方向に長軸を有し、2.0×1.47m・深さ0.92mを測り、底面には凹凸があり、ほぼ長方形を呈する。玄室と竪坑床面の高底差は0.1m前後を測る。玄室入口と玄室は連続し一体となり、天状部は落下し形状は不明である。奥行0.6m・幅0.5m・高さ0.4m前後を測る。玄室内は、土で充満し火葬骨などは検出されない。閉塞板の存在は覆土堆積状況から可能である。出土遺物は、須恵器高台付坏の152がある。

44号跡 竪坑は片側に膨らみを有し主軸長1.14m・短軸長0.9m・深さ0.7mを測る。底面片側に段を有する。玄室入口と玄室は連続し一体となるが、玄室内は覆土で充満し、26号跡同様に火葬骨は検出されない。玄室天状部は落下し形状は不明、奥行0.5m・幅0.4m・高さ0.25前後mを測る。閉塞板の存在は覆土堆積状況から可能である。出土遺物は、無い。

1・2号溝

1号溝 調査区北西端に、8号住居跡・18号地下式土壇墓・2号方形周溝遺構・12号住居跡を掘り込んで検出し、南南西から北北東に延び、全長34mを測る。溝は土層断面から5条以上から成り、溝底面は硬く踏み締められている。

2号溝 調査区中央部やや北側に東西に検出した溝で、全長35.5mを測る。21号炉穴両端で途切れるが、炉穴とは無関係の溝である。断面U字型を呈し、覆土は新相を呈する黒褐色である。

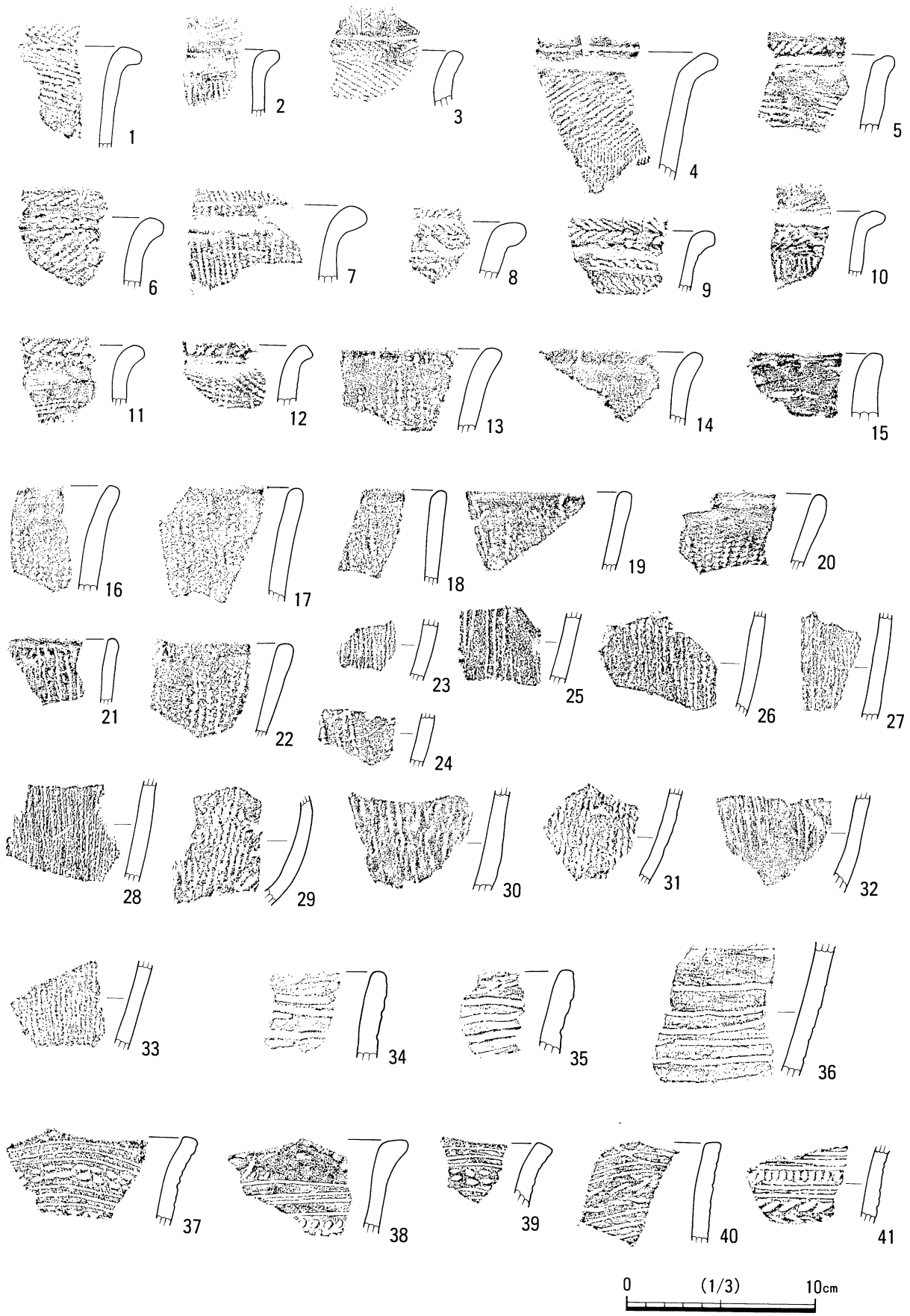
4 検出された遺物

縄文式土器

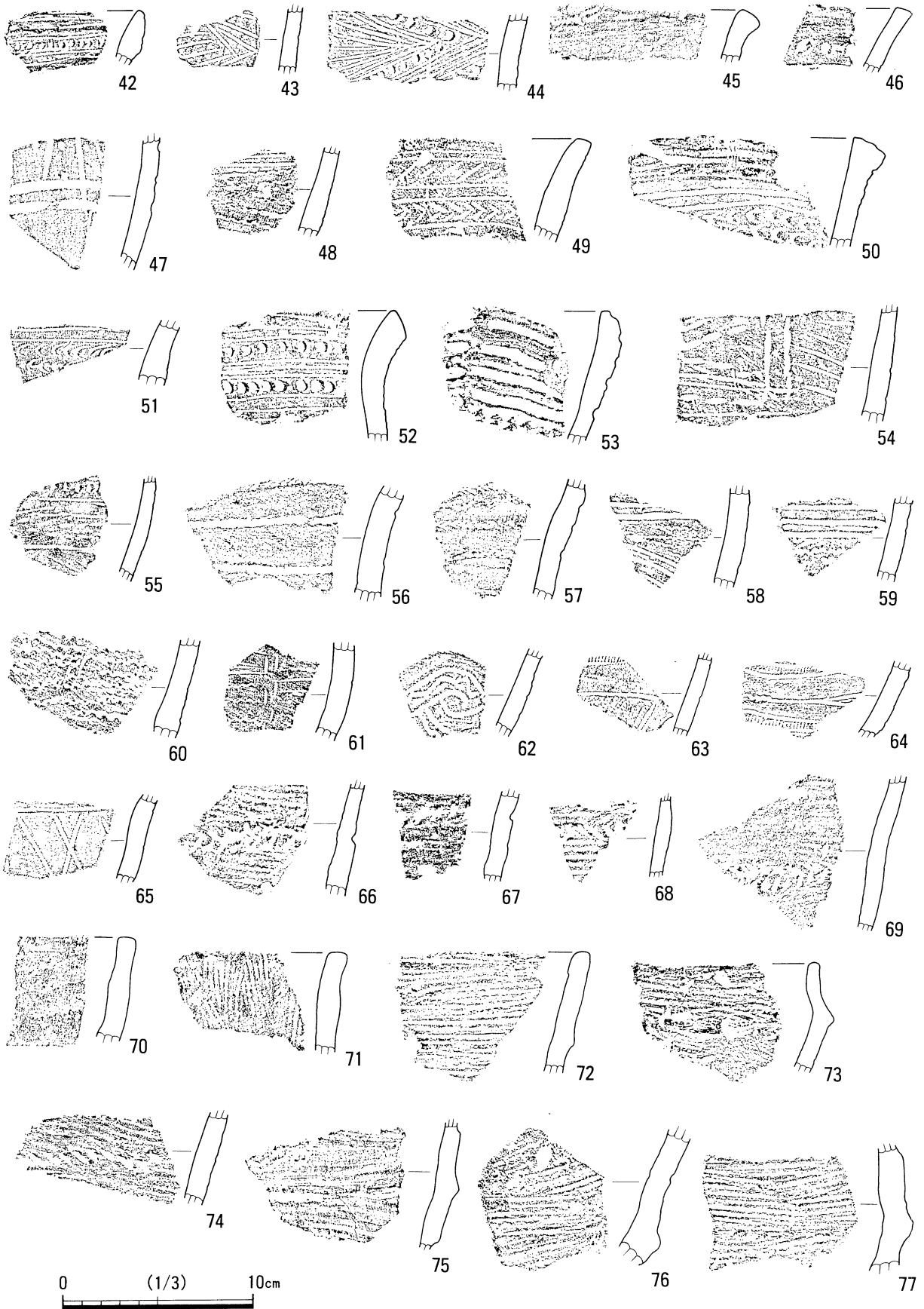
各遺構および遺構外から出土した縄文式土器を、第16図から第19図に上げた。1～12が井草式土器、13～15が夏島式土器、16～33が稻荷台式土器、34～36が田戸下層式土器、37～65田戸上層式土器66～85が条痕文系の茅山式土器である。91は安行3a、90・92～95は加曾利E4式土器である。これらの縄文式土器は、遺構内から出土したものについては各遺構表の中に記載している通りである。

住居跡出土遺物 各住居跡の出土遺物は出土土器計測表に記載した通りであり、ここでは幾つかの注目する遺物について記載するとどめる。

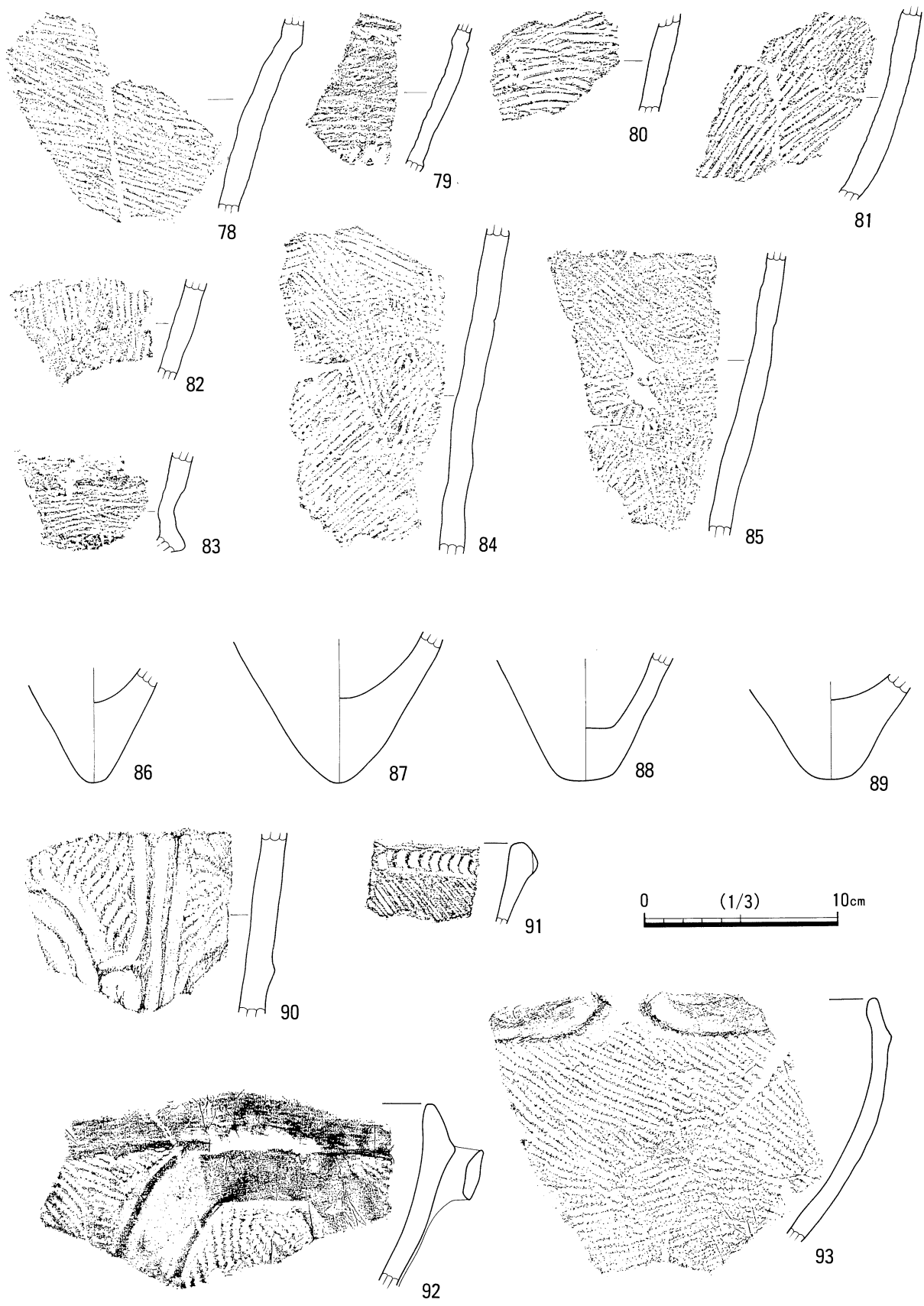
101は、全面黒色処理する土師器坏。102は、内面黒色処理を施す須恵器模倣坏である。107は、1号住居の南壁中央直下の床面から出土した提瓶である。吊り手は欠損しているが、破損痕跡から環状であろう。所属時期は100～106の共伴遺物の土師器などを考慮に入れるとTK209型式に編年できようか。111・115は、全面赤色処理を施す須恵器模倣坏である。112は、内面および外面口縁部に赤色処理を施す土師器坏。124は、弥生後期の5号住居跡覆土から出土した土師器甕である。古式土師の範疇で理解できる遺物であり、口唇部はコの字状のシャープな口縁を有し内面頸部にくの字状の稜線を明瞭に残し、胴部内面は篋削りを施す非在地系の土器である。127は、器表面のひびを孔を穿ち補修痕跡を残す。



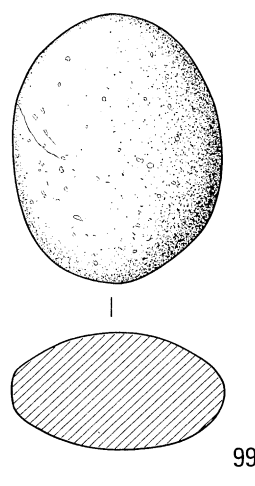
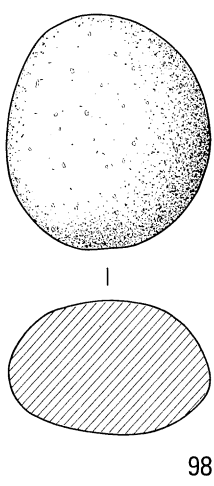
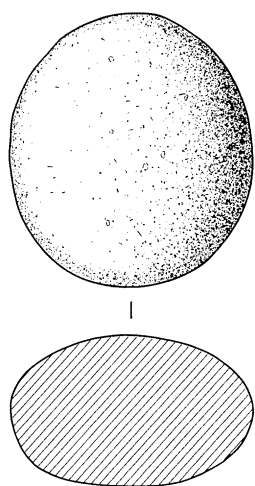
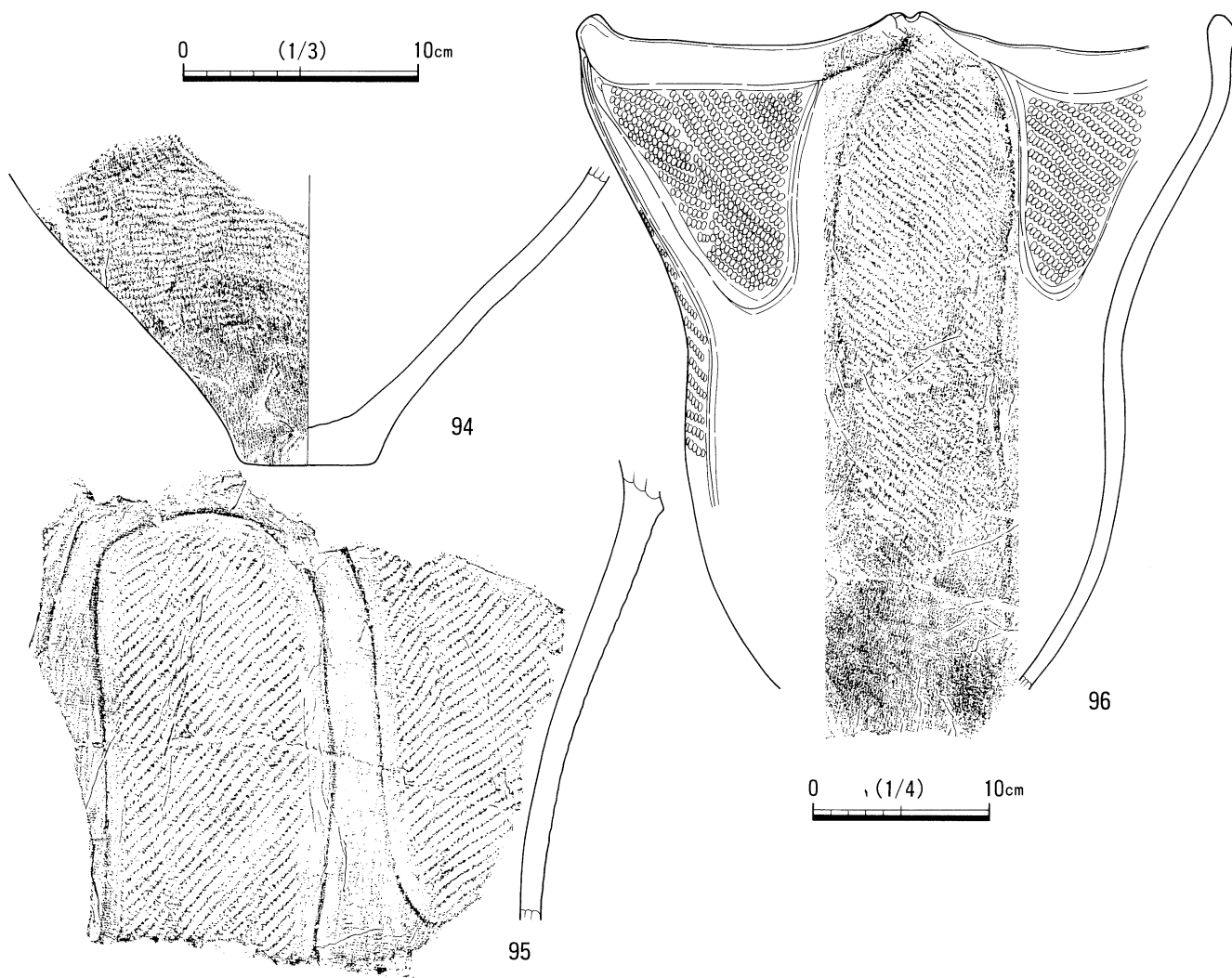
第16図 縄文式土器拓影図(1)



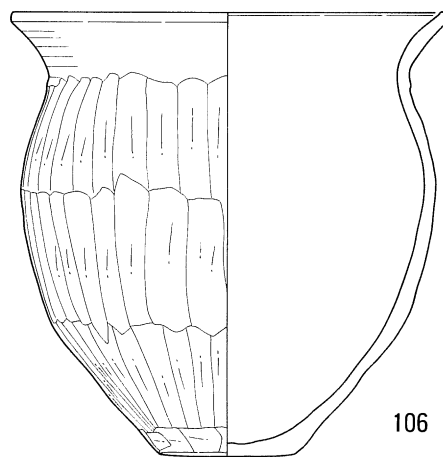
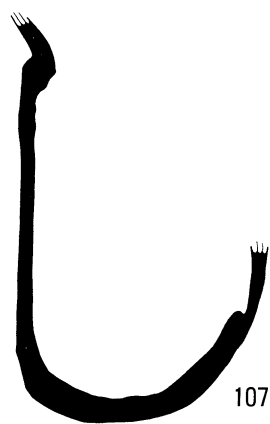
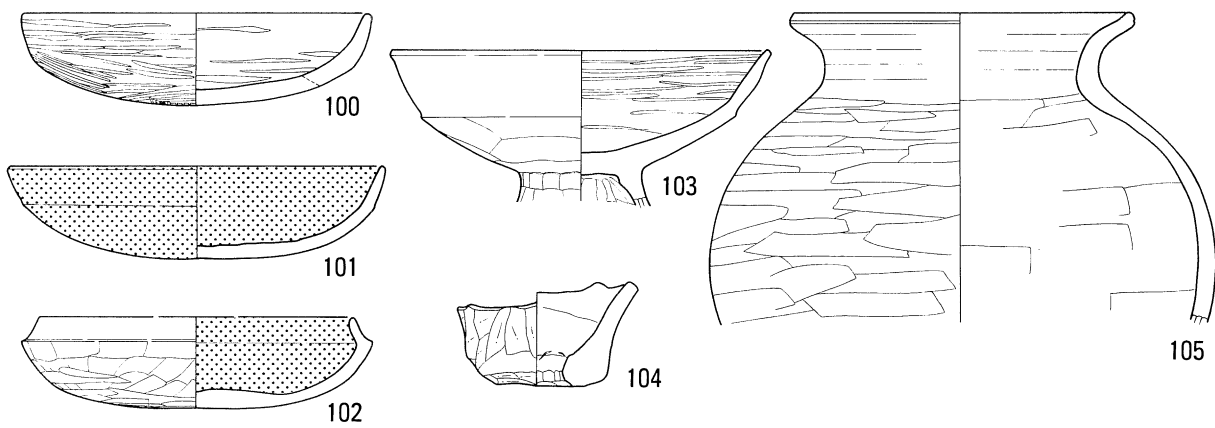
第17図 縄文式土器拓影図(2)



第18図 縄文式土器拓影図(3)



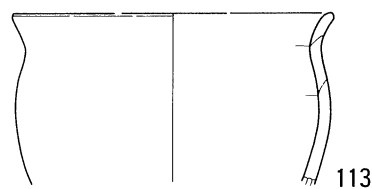
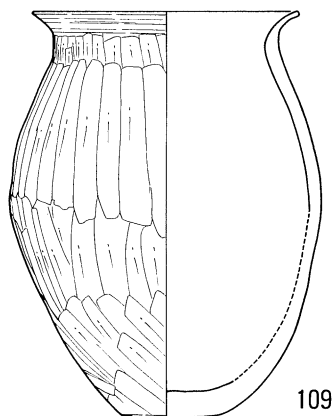
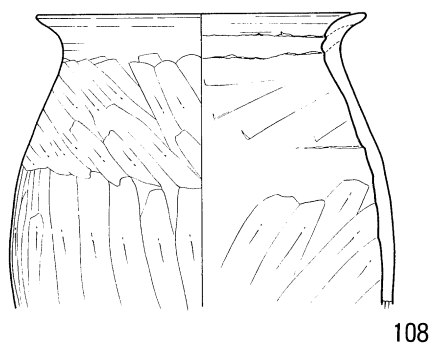
第19図 縄文式土器拓影図(4)・45号跡出土石器実測図



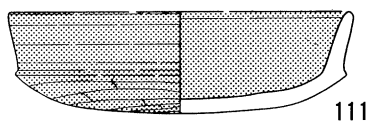
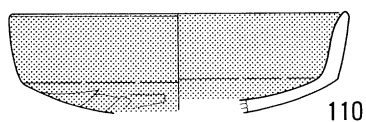
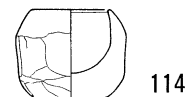
1号住居跡出土遺物

0 (1/4) 10cm

縮尺：(1/3) 100~104・107・110~114
(1/4) 105・106・108・109



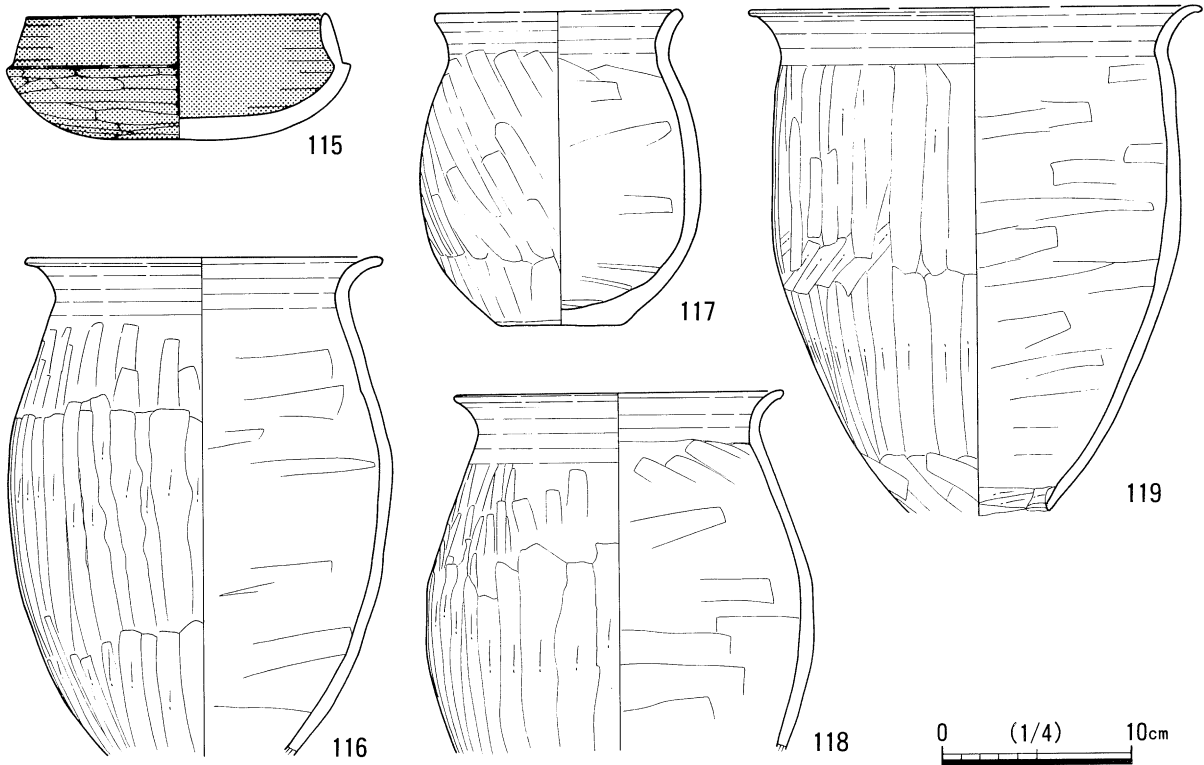
2号住居跡出土遺物



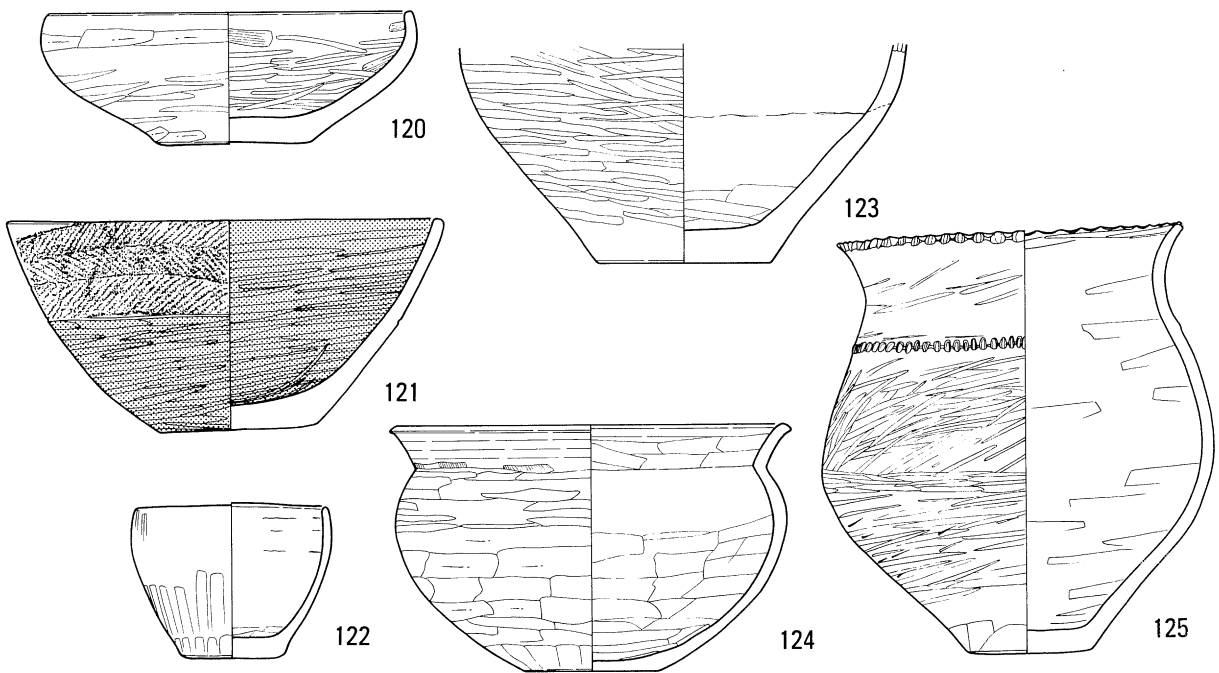
0 (1/3) 10cm

3号住居跡出土遺物

第20図 1・2・3号住居跡出土遺物実測図



4号住居跡出土遺物

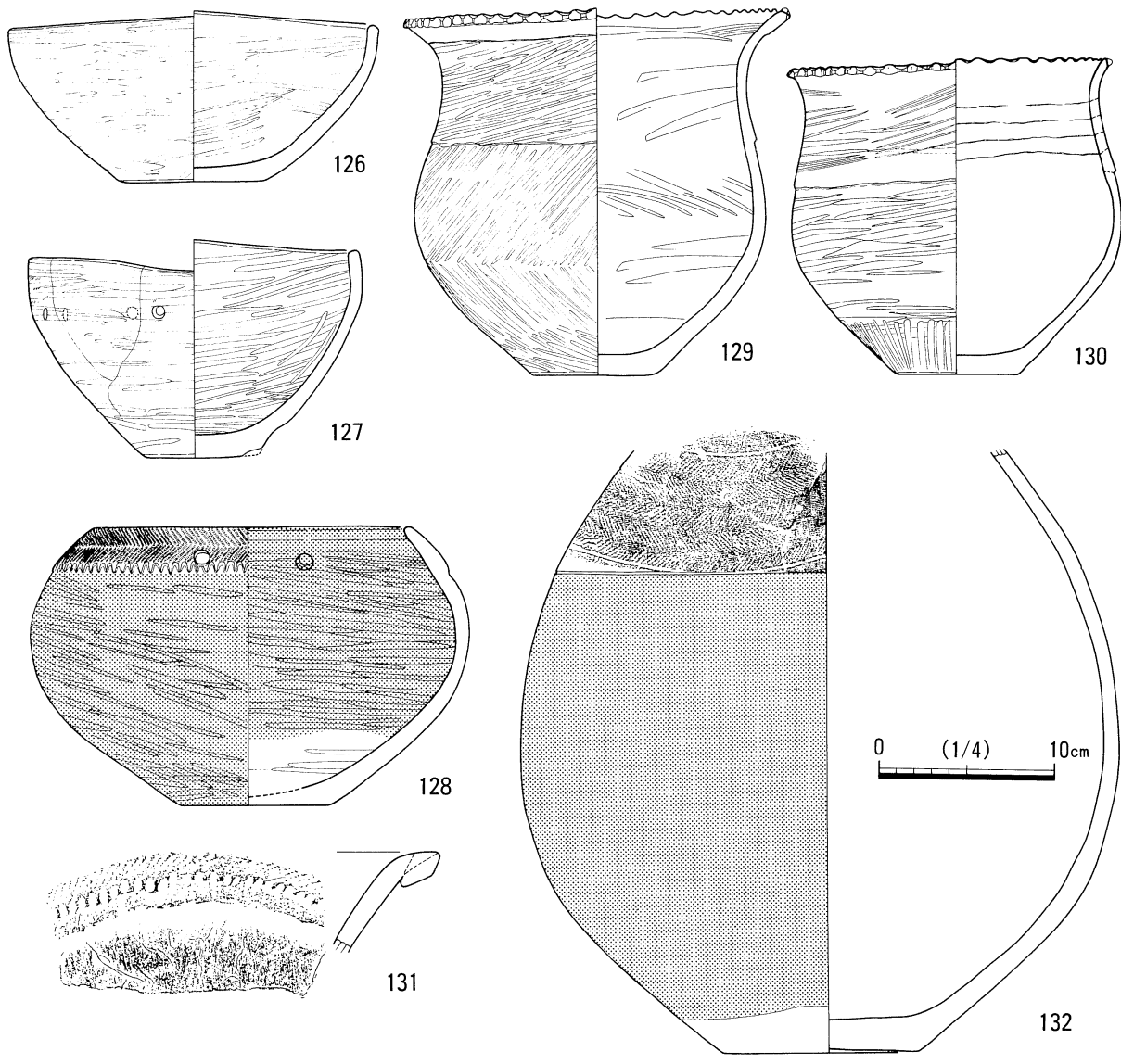


5号住居跡出土遺物

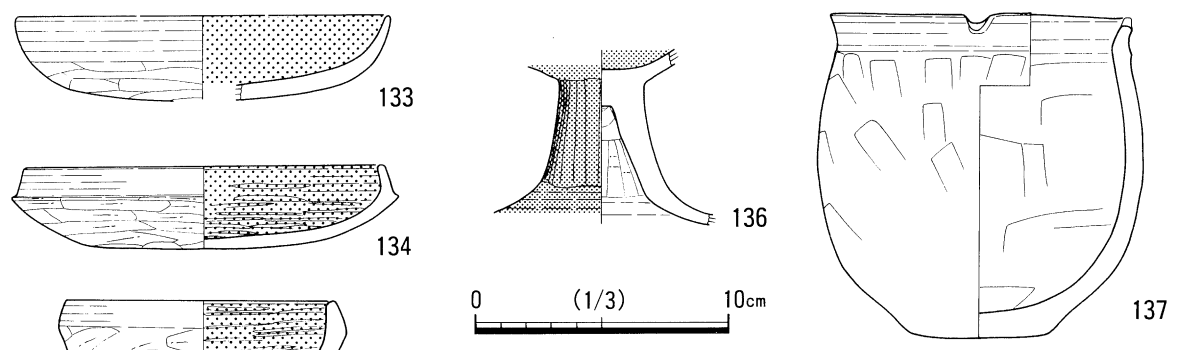
縮尺：(1/3) 115・120~124

(1/4) 116~119・125

第21図 4・5号住居跡出土遺物実測図



6号住居跡出土遺物

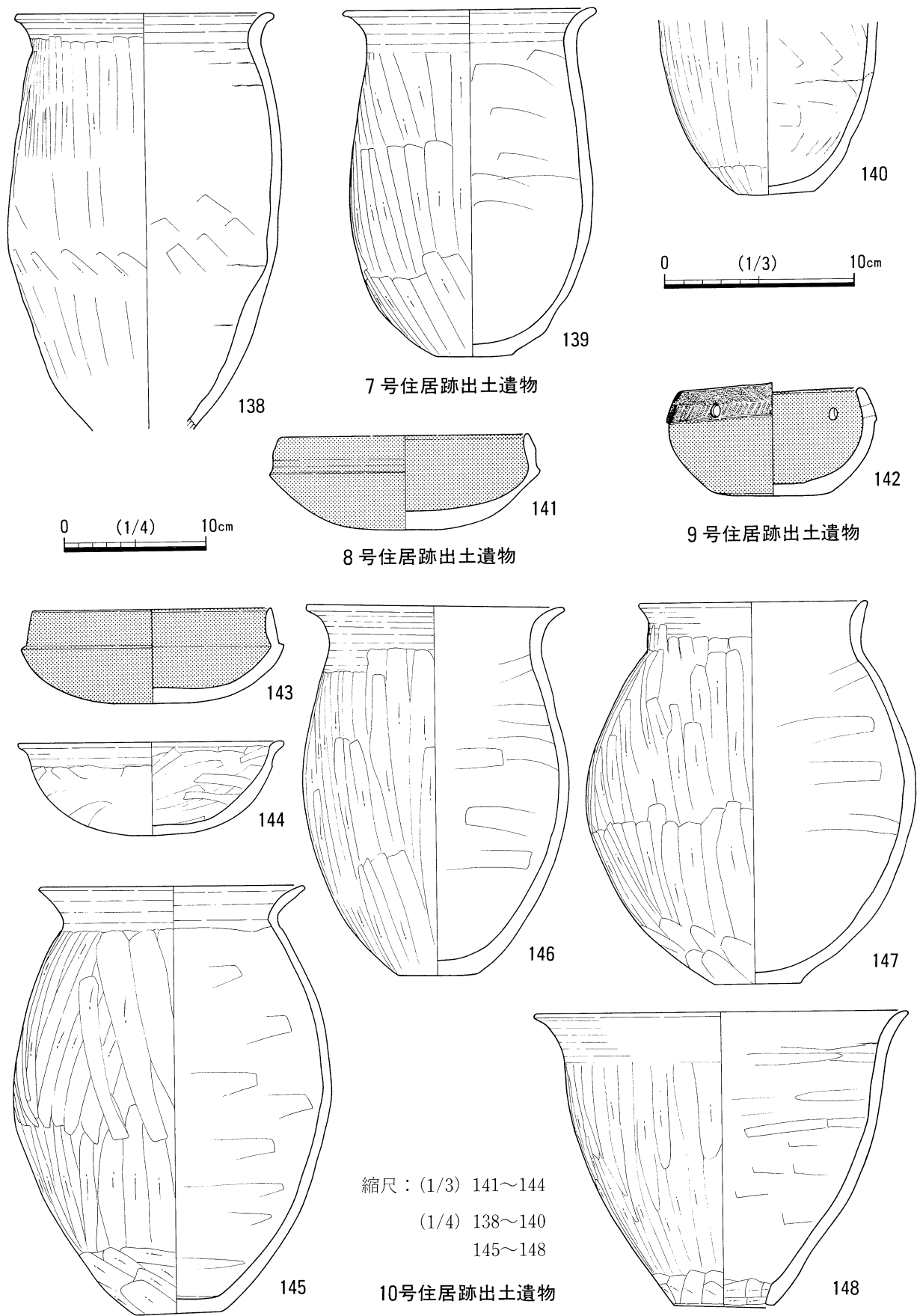


7号住居跡出土遺物

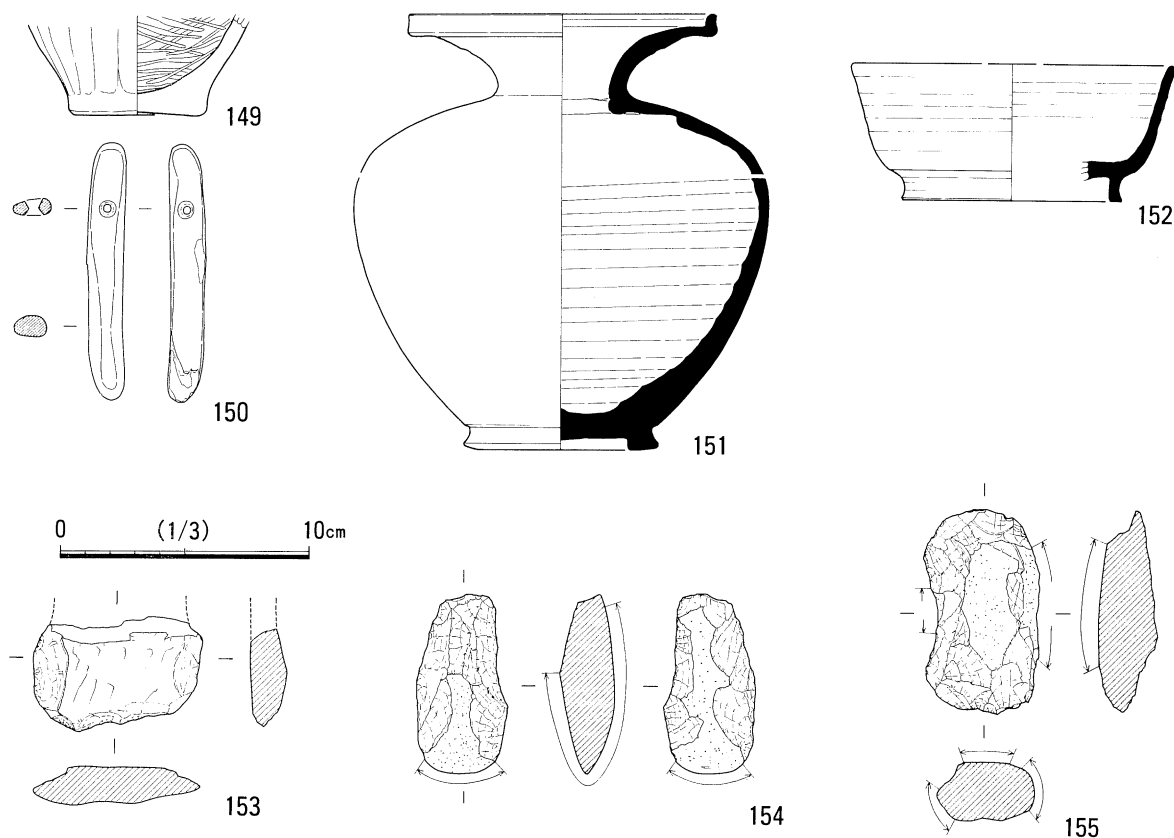
縮尺：(1/3) 126~128・131
133~137

(1/4) 129・130・132

第22図 6・7号住居跡出土遺物実測図



第23図 7・8・9・10号住居跡出土遺物実測図



第24図 33号跡・1号方形周溝墓・26号土壙墓出土遺物ならびに石器実測図

131・132は、接合しないものの同一個体である、外面丹彩を施す。133・134・135は、内面にのみ黒色処理を施し、134は須恵器模倣坏である。136は、7号住居跡覆土出土の高坏脚で赤色する。137は、片口の土師器小型甕である。141・143は、内外面赤色処理を施す須恵器模倣坏である。145～148は、10号住居跡竈右袖に接して一括出土した甕3・甑1点である。

土壙出土遺物

150は、33号跡から出土した、長さ13.35cm・幅1.5cm・厚さ0.5～0.85cm・重さ20.3gの自然石を加工した有孔石棒である。孔は両側穿孔で孔径0.35～0.65cmを計測する。孔以外には加工および使用痕跡はなく、端部が僅かに破損するのみである。

方形周溝遺構出土遺物

151は、1号方形周溝遺構北東隅覆土出土の灰釉壺である。胴部が接合しないが器表面は焦茶色を呈し、口縁部と肩部に自然釉がかかり、三段構成による。頸部は短く外反ぎみに大きく外傾し、口縁部端部は水平と成り、口唇部は短く垂直にたちあがる。編年的には、猿投窯の井ヶ谷78号窯式期に比定可能である。

地下式改葬墓出土遺物

152は、26号跡覆土上層から出土した須恵器高台付坏である。胎土・焼成などの特徴から永田・不入窯産の製品である。所属時期は、八世紀後半～九世紀初頭と考えられよう。

集石・遺構外出土石器

97・98・99の石は、45号跡からの出土で、重さは900・570・586gをそれぞれ計る。153～155の石斧は、遺構外から出土する。重さはそれぞれ57.9・60.9・57.9gを計る。

表3 遺物観察表 (100~152)

遺物番号	種別 器種 存度	計測値 ()は推定 単位(cm)	特徴	胎土・色調 焼成・出土 位置等	遺物番号	種別 器種 存度	計測値 ()は推定 単位(cm)	特徴	胎土・色調 焼成・出土 位置等
1住 100	土師器 坏 1/3	口一 (14) 高一 3.7	口縁は内湾ぎみに立ち上がる。全体に細な篋磨きを施す	微密・暗褐色 ・良好・カマ ド覆土	4住 115	土師器 坏 形 完	口一 12.1 大一 13.8 高一 4.85	肉厚ぎみの口縁は内方へすぼまる。内外面赤色を施す。	微密・地は明褐色・普通・床面
1住 101	土師器 坏 形 完	口一 15 高一 3.7	底部から口縁は内湾ぎみに立ち上がる。内外面黒色処理(部分的に残す。)	砂粒質・赤褐色・良好・床面	4住 116	土師器 甕 底部欠く	口一 19 胴一 20.3 高一 26.3+	口縁は大きく外反し開く。胴部外面は雑な篋削り、内面篋ナデを施す。	砂粒含む・暗褐色(黒斑) 普通・床面
1住 102	土師器 坏 1/4	口一 (12.7) 大一 (14) 高一 (3.6)	須恵器模倣坏。外面口縁及び内面黒色処理	微密・内黒色 ・外明褐色・ 良好・覆土	4住 117	土師器 甕 1/4	口一 (13) 胴一 (15) 底一 (6.5) 高一 16.5	口縁は外反しながら開く、胴部は丸い。外面篋ナデ。内面雑篋ナデ。	微砂粒含む。 暗赤褐色・良好・床面
1住 103	土師器 坏 を欠く 高脚	口一 15.2 高一 6.1+	体部中位に綾線を有し、口縁は直線的に開く。口縁外面及び内面は部分的に篋磨きを施す。	微密・暗褐色 (黒斑あり) ・良好・カマ ド内	4住 118	土師器 甕 上半 1/2	口一 17.5 胴一 20.3 高一 19 +	外面篋削り、内面篋ナデ。口縁内外面横ナデ。	砂粒含む・暗褐色(黒斑) 普通・床面
1住 104	土師器 坏 形 手づく 完	口一 7.2 高一 4.2 底一 4.5	底部に一孔を有し、口唇部は焼成前に篋削りを施し波状を程する。	微密・明褐色 良好・床面	4住 119	土師器 甕 底欠く 1/2	口一 (24) 胴一 21.6 高一 26 +	外面削り状の篋ナデ・内面雑な磨きを施す。口唇部は丸く肉厚さみ。	微砂粒含む。 明褐色(黒斑) 普通・床面
1住 105	土師器 甕 口 胴 上半 1/3	口一 (18) 頸一 (14.5) 胴一 (27) 高一 16.5+	胴部は丸く球形を程し、口縁は外反し開き、口唇端部は摘み上げる。内面は雑な篋ナデ。	微砂粒質・明褐色(黒斑あり) ・普通・ カマド覆土	5住 120	弥生式土器 浅 鉢 1/3	口一 14.6 底一 6 高一 5.3	内面に篋磨き・外面は雑な篋ナデを施し、部分的に磨き状の篋ナデを施す。口縁は内湾する。	微砂粒含む。 暗褐色(黒斑) ・普通・床面
1住 106	土師器 甕 1/2	口一 (23) 胴一 22 底一 7.5 高一 23.5	口縁部は外反ぎみに開き、口唇部は上方に摘み上げる。胴最大径は胴上位にある。外面篋削り施す。	小砂粒含む粗密・淡褐色(黒斑あり) ・普通・床面	5住 121	弥生式土器 浅 鉢 ほぼ完形	口一 17.5 底一 6.3 高一 8.4	内面と外面下半に丹彩を施す。内面・外面下半篋磨き。外面上半には3段の羽状縄文を施す。	白色砂粒含む ・明褐色(丹彩) ・普通・ 床面
1住 107	須恵器 甕 口縁欠く 1/5	口一 5.6+ 高一 17.3+ 胴一 16.3 高一 10.2	口縁部を欠く。吊り手は欠損する。球状の体部外面に荒いカキ目を残す。	微密・暗灰色 ・良好・床面	5住 122	古式土師? 小型 鉢 1/2	口一 7.7 底 4 高 6.1	外面上半には磨き状の篋ナデ、下半は篋ナデ。内面は横ナデと篋ナデ。	微密・明褐色 ・良好・覆土
2住 108	土師器 甕 胴下半欠く	口一 17.5 胴一 20.5 高一 15.5	口縁は大きく外反し開く。胴部はやや長め。外面荒い篋削り。内面雑な篋ナデ。	砂粒含む・明茶(黒斑あり) ・良好・床面	5住 123	弥生式土器 甕 下半 1/2	底一 7.5 高 8.6+	外面雑な篋磨き、内面雑な篋ナデを施す。	白色砂粒含む ・明褐色(黒斑) ・普通・ 床
2住 109	土師器 甕 ほぼ完形	口一 14 胴一 16.5 底一 6 高一 21.5	口縁は大きく外反し開き、口唇は丸身を有する。外面は篋削り、内面は雑な篋ナデを施す。	密・暗褐色 (黒斑あり) ・良好・床面	5住 124	古式土師 甕 1/2	口一 16 胴一 15.6 底一 5.5 高 9.8	外面下半篋削り、上半に篋磨き、内面篋削り及び篋ナデを施す。	微砂粒含む・ 淡茶褐色(黒斑) ・良好・ 覆土
3住 110	土師器 坏 底欠く 1/2	口一 13.5 高一 3.9+	底はやや浅めで丸身を有する。口縁は直立ぎみに立ち上がる。内外面赤色を施す。	微密・赤色(地は明褐色)普通・床面	5住 125	弥生式土器 甕 ほぼ完形	口一 18.4 胴一 20.6 底一 6.6 高 22.7	外面に雑な篋磨き、内面篋ナデを施す。	砂粒含む・明茶褐色(黒斑) ・普通・床面
3住 111	土師器 坏 1/4	口一 (14) 高一 4.05	須恵器模倣坏。口縁は直線的に外へ開き、底体部は浅く平底ぎみとなる。内外面赤色を施す。	微密・赤色(地は明褐色)普通・カマド・覆土	6住 126	弥生式土器 浅 鉢 部分欠く	口一 15.9 底一 6.5 高一 7.3	全面に篋磨きを施す。口縁は内湾する。	微密・明褐色 (黒斑)・良好・床面
3住 112	土師器 坏 1/4	口一 (13) 高一 (4.8)	底体部は丸く、口縁はやや外へ開く。口縁外面及び内面は赤色を施す。	微砂粒含む明褐色・良好・カマド覆土	6住 127	弥生式土器 鉢 ほぼ完形	口一 14.3 底一 9.4 高一 5.3	底部外面以外に篋磨きを施す。口縁部にヒビ割れによる補修孔を有する。	微密・明褐色 ・良好・床面
3住 113	土師器 甕 上半部 1/4	口一 (17) 高 9 +	頸部が僅かにすぼむ。口縁は短く、僅かに開く。器表面荒れている。	砂粒含む。暗褐色(黒斑) 普通・覆土中	6住 128	弥生式土器 鉢 底部欠く	口一 13.7 胴一 18.9 底一 6.5 高一 11.9	内外面丹彩を施し、篋磨きする。口縁は2段の羽状縄文を施し、2孔を有する。	密・赤褐色 (地は明褐色 で黒斑)・良好・床面
3住 114	土師器 坏 手づく 1/2	口一 3.3 胴一 4.5 高一 3.5	口縁は内へすぼめ、丁寧な仕上げとなる。	微密・明褐色 ・良好・カマ ド覆土					

遺物番号	種別 器種 遺存度	計測値 ()は推定 単位(cm)	特 徴	胎土・色調 焼成・出土 位置等	遺物 番号	種別 器種 遺存度	計測値 ()は推定 単位(cm)	特 徴	胎土・色調 焼成・出土 位置等
6住 129	弥生式土器 甕 一部欠く	口— 22 胴— 20 底— 6.7 高— 20.9	外面斜方向にナデ状の 篋磨き。内面横ナデと 篋ナデを施す。口縁部 は肉厚の波状を程す る。	微砂粒含む・ 暗褐色(黒斑) ・良好・床面	8住 141	土 師 器 坏 1/2	口— (13.4) 大— (14.4) 高— 5	内外面に僅かに丹彩痕 跡を屈める。器表面が 荒れていて整形不明	微密(茶色粒 子)・地は明 褐色・不良・ 覆土
6住 130	弥生式土器 甕 一部欠く	口— 18 胴— 18.6 底— 7.2 高— 18	外面磨き状の篋ナデ、 内面篋ナデを施す。内 面口縁に輪積痕を明瞭 に残す。口縁は波状を 程する。	茶色粒子を含 ・暗褐色(黒 斑)・普通・ 床面	9住 142	弥生式土器 鉢 部分欠く	口— 9.7 大— 11 底— 6 高— 6	肉厚の口縁外面及び口 唇部に細羽状縄文を施 す。内外器表面に僅か に丹彩痕跡を屈める。	砂粒質(白色 粒多い)・淡 褐色・普通・ 床面
6住 132	弥生式土器 壺 胴部 1/4	胴— (34) 底— (11) 高— 34 +	胴部に丹彩を施し、丁 寧な篋ナデ。内面篋ナ デ。胴上方に沈線で区 画された5段の羽状縄 文を施す。	微砂粒含む・ 赤褐色(地は 明褐色)・普 通・覆土	10住 143	土 師 器 坏 1/2	口— (13) 大— (14) 高— 5	内外面共に丹彩痕跡を 僅かに屈める。口縁立 ち上りは長く、僅かに 内傾。	微密・地は明 茶褐色・普通 ・カマド覆土
7住 133	土 師 器 坏 1/3	口— (15) 高— 3.4	内面黒色処理。内面と 口縁外面横ナデ。底体 部ナデ状の篋削りを施 す。	微密・暗褐色 ・良好・カマ ド覆土	10住 144	土 師 器 坏 2/3	口— 14.2 高— 5	口縁端がくの字に開き、 底体部は丸い。外面は 削り状の篋ナデ。内面 は雑な篋ナデ。	微砂粒質(白 色粒子含む) 良好・床面
7住 134	土 師 器 坏 1/3	口— 14.3 大— 15.3 高— 3.4	須恵器模倣坏。内面篋 磨き。底体部外面篋削 り。口縁内外面横ナデ。	微密(茶色粒 含む)・暗褐色 良好・床面	10住 145	土 師 器 甕 一部欠く	口 18.9 胴底 22.6 高 6.3 30.2	口縮内外面横ナデ。胴 部外面上半ナデ状の篋 削り下半篋削り。内面 は丁寧な篋ナデ。	砂粒質・淡褐 色(黒斑)普 通・カマド床 面
7住 135	土 師 器 坏 一部欠く	口— 10.8 大— 11.5 高— 4.8	内面雑な篋磨き。外面 ナデ状の篋削りを施す。	白色砂粒含む 暗茶色・普通 ・カマド内	10住 146	土 師 器 甕 ほぼ完形	口 18.2 胴底 18.8 高 5.7 26.3	口縁内外面横ナデ。外 面篋削り。内面雑な篋 ナデを施す。器表面荒 れている	砂粒質(白色 粒子含む)・ 暗赤褐色・床 面
7住 136	土 師 器 坏 脚の 一 部	基— 3.6 高— 7 +	坏内外面及び脚外面丹 彩を施す。脚は篋削り。	微密(茶色粒 含む)・白褐 色・良・覆土	10住 147	土 師 器 甕 ほぼ完形	口 16.5 胴底 23.4 高 6 27	口縁径が小さく、直立 ぎみに立ち僅かに開く。 胴外面丁寧な篋削り。 内面篋ナデ。	微砂粒質・明 褐色・良好・ 床面
7住 137	土 師 器 甕 1/2	口— 12 胴— 13 底— 6 高— 12.8	口縁に片口を有する。 内外面共篋ナデ。口縁 は短く僅かに開く。	砂粒質・暗黒 褐色・普通・ 床面	10住 148	土 師 器 甕 完 形	口— 26.5 底— 7.2 高— 21	口縁内外面横ナデ。胴 外面丁寧な篋削り。内 面削り状の篋ナデ。	微砂粒質(白 色粒子含む) ・明茶褐色 (黒斑)良好 ・床面
7住 138	土 師 器 甕 底部欠く	口— 18.6 胴— 19.3 高— 29.4+	口縁内外面横ナデ。胴 外面篋削。胴内面篋ナ デ。口唇は僅かに玉状 を成す。	砂粒質・暗茶 褐色・普通・ カマド	2方 周 151	灰 釉 甕 分	口— (12.5) 頸— 5.2 胴— (17) 底— 8 高— (17.5)	頸部は短かく、三段構 成による。口縁は大き く開き端部は上方に摘 み上げる。内面下半に はロクロ整形痕を明瞭 に残す。高台は角状を 程する。	微密・外面淡 濃茶・良好・ 周溝覆土
7住 139	土 師 器 甕 ほぼ完形	口— 18 胴— 17.2 底— 5.6 高— 24.5	胴外面篋削り、内面篋 ナデ。口縁内外面横ナ デ。胴下方に体部最大 径を有する。	微砂粒を含む ・淡茶色。良 好・床面	26号 跡 152	須 恵 器 高台付坏 1/3	口— (14) 底— (9.5) 高— 5.5	全面ロクロ整形痕を残 す。口縁・体部は直線 的に外方にやや開く。	微密(少量の 白色粒子含 む)暗青灰色 ・覆土
7住 140	土 師 器 甕 下半 3/4	胴— 15.3+ 底— 5.4 高— 12.2+	外面篋削り。内面篋ナ デ	砂粒含む。暗 褐色(黒斑) 普通・床面					

ま と め

今回の福増山ノ神遺跡の調査で検出した遺構に、奈良～平安時代の墓がある。1・2号方形周溝遺構と14・26・44号の地下式改葬墓である。1号方形周溝遺構および26号地下式改葬墓は、出土遺物から、八世紀後半から九世紀第1四半世紀の年代が与えられる。1号方形周溝遺構では埋葬施設に地下式改葬墓を採用している。2号からは埋葬施設が検出されないが、おそらくは方台部に火葬骨ないし再葬骨を改葬し納めた小墓壙が有り流失し失われたものであろうか。14・26・44号は埋葬施設の地下式改葬墓のみの検出で方形周溝の存在は否定できないが、14号跡からは火葬骨が検出されている。この他、墓として認められる遺構に、遺物がなく時期限定の決め手に欠けるが、8・18・37号の地下式土壇墓または有天井土壇と呼称されるものがある。また、方形周溝遺構の周辺の検出例では東方250mの武士遺跡⁽¹⁾で方形周溝遺構1基、東南東600mの現在調査中の武士土器石遺跡⁽²⁾で41基・勝間遺跡⁽³⁾1基の方形周溝遺構が確認されており、当台地が奈良～平安期の大墓域と成る。これは、当台地の西に占地する国分寺以前の建立とされる武士廃寺との関連性から見ても留意するところである。

養老川流域における所謂方形周溝遺構の検出した主な遺跡を上げてみると、上記以外に国分寺台遺跡群では天神台・諏訪台遺跡⁽⁴⁾50基＋持塚・山倉・荒久・中台・辺田・台・御林跡遺跡⁽⁵⁾等でそれぞれ1基ないし数基、荻原野⁽⁶⁾16基・外迎山28基・山見塚⁽⁷⁾9基・奉免上原台⁽⁸⁾約50基等がある。この方形周溝遺構および地下式改葬墓・地下式土壇は、終末期の方墳群中に存在し、その成立については終末期古墳からの墓制と密接な関係をゆうしていることは周知されるところである。このような立地条件下において、養老川流域での終末期古墳埋葬施設の主体をなす木棺直葬の墓壙が流失したあとの方墳か方形周溝遺構かの判別に苦慮することも指摘できる。(10m前後以下の方墳の墓壙は地山を掘込み遺存するため判別は容易であるが、10数m前後の方形周溝遺構としては比較的大型のものと同規模の方墳では、周溝形態の比較だけでは困難な場合もある。)

市原台地での地下式土壇は、当地域の円丘系主体の後期古墳では周溝内土壇、終末期の方丘系では周溝外の従属的埋葬施設として位置づけられている。この事実をふまえると、古墳時代後期から伝統的な地下式土壇墓を埋葬施設として採用する小規模な方形周溝遺構(方墳)は、地下式改葬墓より古く位置づけられるかもしれない。また、前述した通り方形周溝遺構には、埋葬施設が検出されるものとされないものがあるが、前者では伸展葬可能な地下式横穴墓・地下式改葬墓・方台部内小墓壙、後者では方台部小墓壙内埋葬が推定できる。地下式改葬墓と墓壙内埋葬には、火葬骨と再葬的な骨の埋葬があり、小墓壙内では未だ再葬骨埋葬の明確な類例を管見しない。

養老川流域での埋葬施設の変遷では、渡辺修一氏が指摘されているように、市原以南に集中的に分布する横穴墓を模倣する地下式横穴墓を古く考え、基本的には地下式横穴墓→地下式改葬墓→再葬用小墓壙と考えるが、この種の報告例から察すると、小地域での埋葬施設の独自な変遷があるようにも見受けられる。

筆者はこれまで便宜的に方形周溝遺構の名称を用いてきたが、未だ定まった名称がないこともこの遺構の特徴の一つに上げられる。終末期小規模古墳⁽¹⁰⁾・方形周溝状遺構・方形周溝・群小区画墓⁽¹¹⁾・方形区画改葬墓⁽¹²⁾・方形墳墓・方墳系周溝墓などの名称がある。この呼称の数が示す通り方形周溝遺構に関しては、多くの先学諸氏がその資料の増大とともに注目し論じられている。

このことは、この種の遺構を解明することが、七世紀～九世紀にかけての古墳時代から律令社会に至る、墓制ばかりではなく社会的政治的背景を知るうえで十分な内容が包括されているからであります。

最後に、今回の調査で検出した本遺跡の方形周溝遺構・地下式改葬墓を、新たなる類例の一つに加えていただければ幸いに存じます。また、今回の調査に御協力をいただいた関係諸機関ならび、機材の提供を快く引き受けていただいた株式会社城装ならび同代表取締役山岡弘氏に深く感謝する次第であります。

註

- (1) 須田 勉・半田堅三『武士遺跡』武士遺跡発掘調査団 1976年
- (2) 千葉県文化財センターにより1987～89年度調査実施中
- (3) 平野元三郎・谷島一馬 1973年に現在の市原東給水場建設に伴い調査実施。
- (4) 浅利幸一『市原市文化財センター年報昭和57・58年度・「天神台遺跡」』
- (5) 田中新史『古代探叢・「古墳時代終末期の地域色」』早稲田大学考古学会 1985年
- (6) 近藤 敏『第5回市原市文化財センター遺跡発表会要旨・「新生荻原野遺跡A区・一本松塚」』
(財)市原市文化財センター
- (7) 木對和紀『外迎山・唐沢・山見塚遺跡』(財)市原市文化財センター 1987年
- (8) 田中清美『市原市文化財センター年報62年度・「奉免上原台遺跡」』
- (9) 渡辺修一『研究連絡誌第14号・「群小区画墓の終焉(2)」』
(財)千葉県文化財センター 1985年
- (10) 註5に同じ
- (11) 註7に同じ
- (12) 木對和紀『市原市文化財センター研究紀要I・「房総における改葬系区画墓の出現期」』 1987年

参考文献

1. 金丸 誠『研究連絡誌第1号・「房総半島における方形・円形周溝について」』
(財)千葉県文化財センター 1982年
2. 渡辺修一『研究連絡誌第6号・「群小区画墓の終焉期(1)」』(財)千葉県文化財センター 1983年
3. 大村 直『下鈴野遺跡』(財)市原市文化財センター 1987年

写真図版



(写真中央上には鍋塚等の新堀古墳群を望む)

福増山ノ神遺跡航空写真遠景

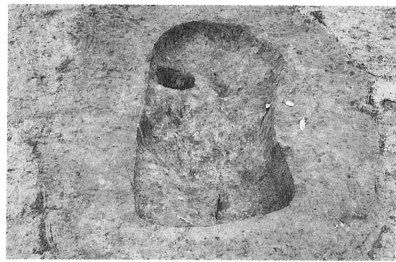


福増山ノ神遺跡航空写真近景

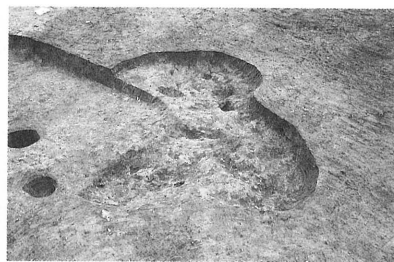
图版 2



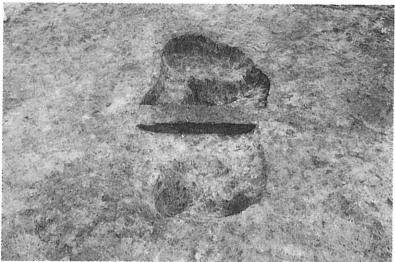
1 号迹



2 号迹



3 号迹



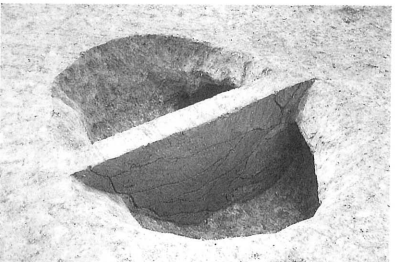
4 号迹



5 号迹



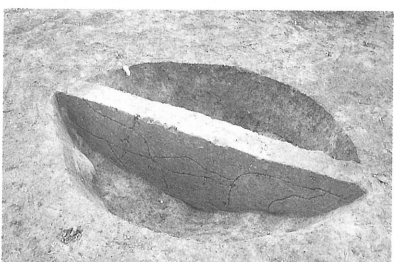
7 号迹



8 号迹



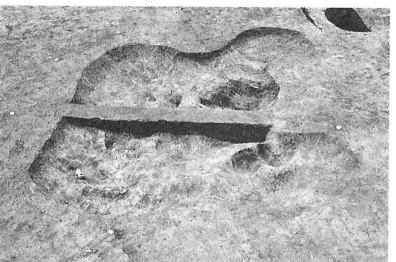
8 号迹



9 号迹



10 号迹



11 号迹



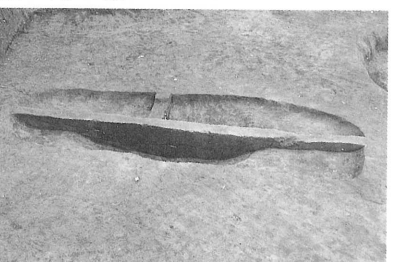
12 号迹



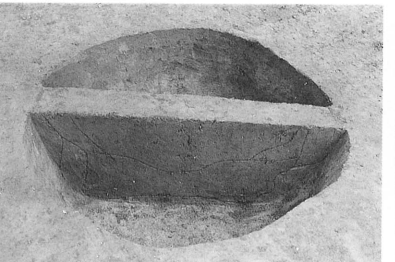
13 号迹



15 号迹



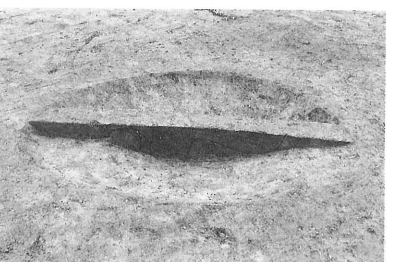
16 号迹



17 号迹



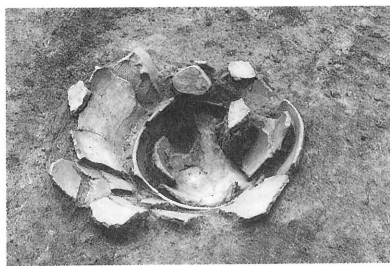
18 号迹



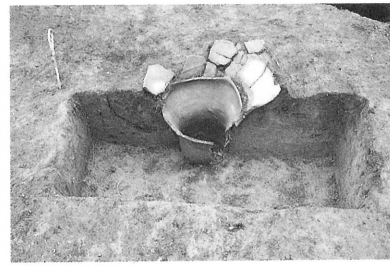
19 号迹



21 号迹



22 号迹



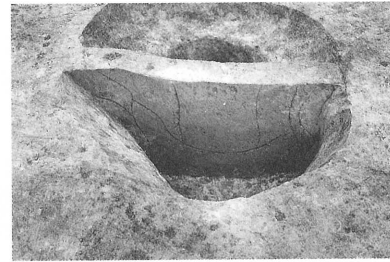
22 号迹



23 号迹



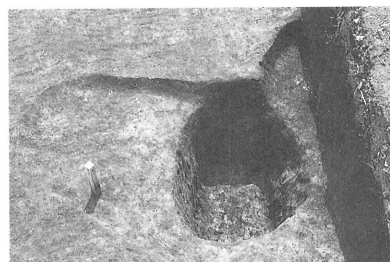
27 号迹



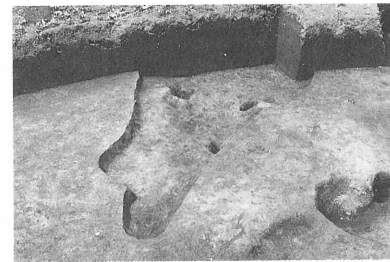
28 号迹



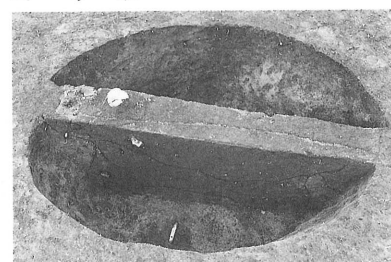
29 号迹



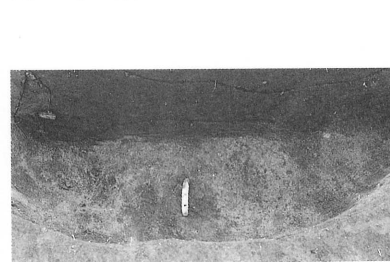
30 号迹



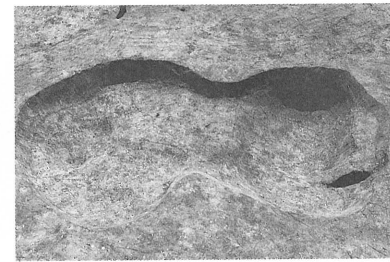
31 号迹



33 号迹



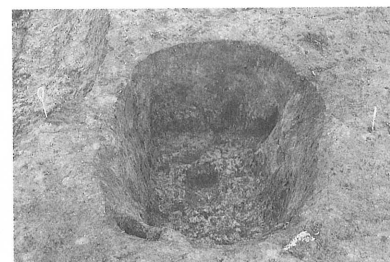
33 号迹



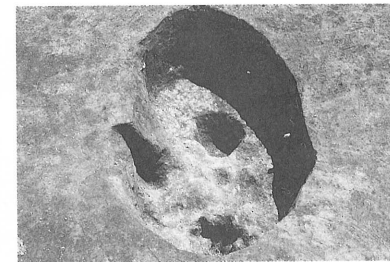
35 号迹



36 号迹



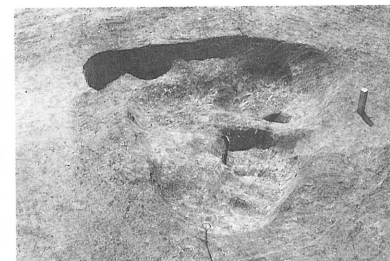
38 号迹



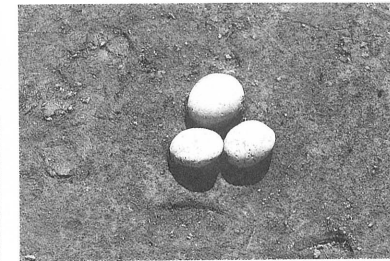
40 号迹



41 号迹

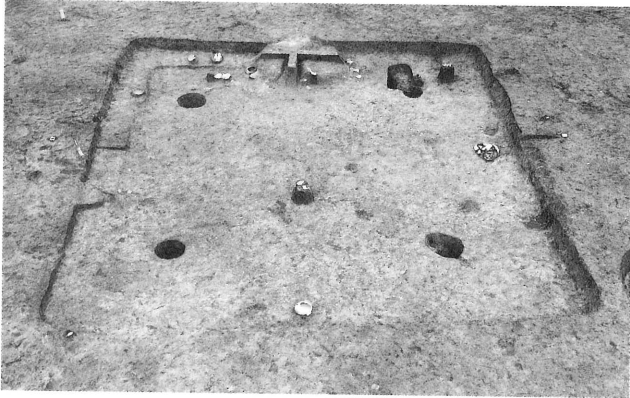


43 号迹

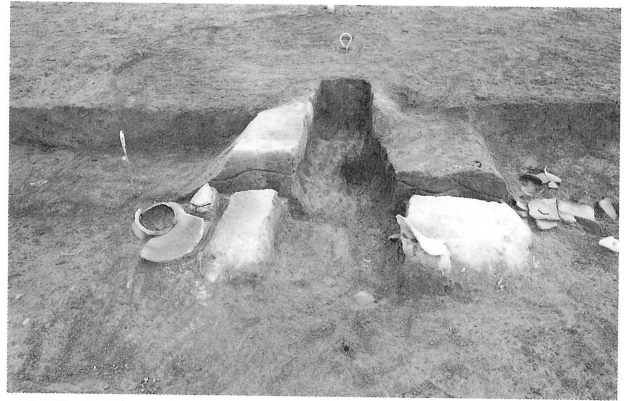


45 号迹

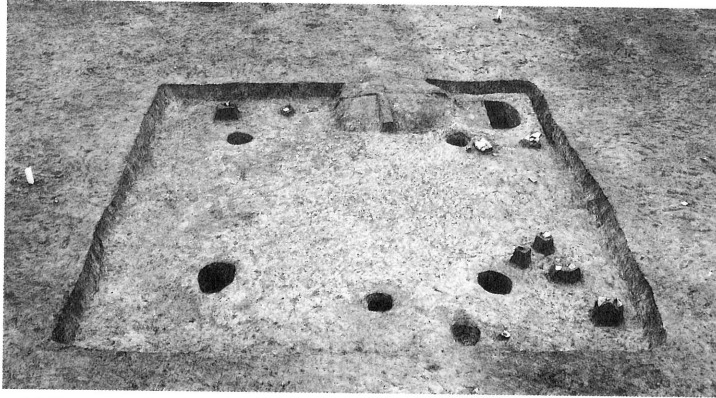
図版 4



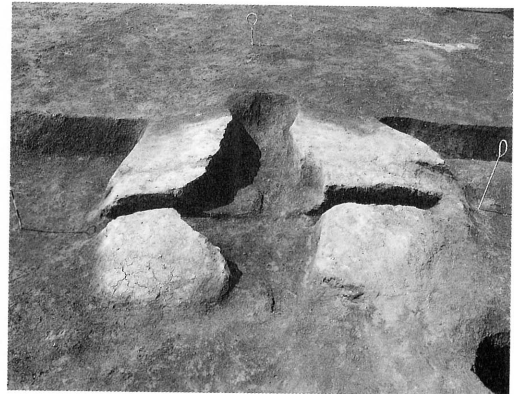
1号住居跡



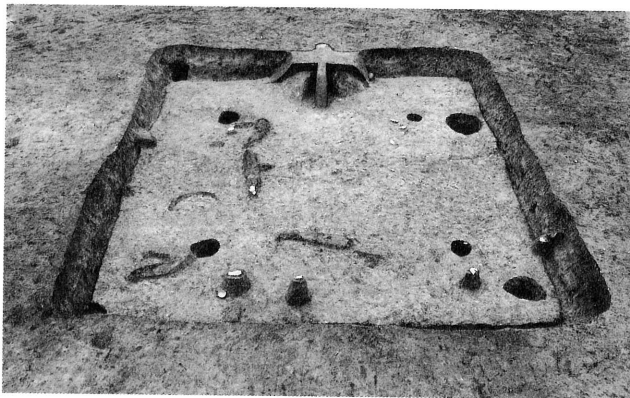
1号住居跡カマド



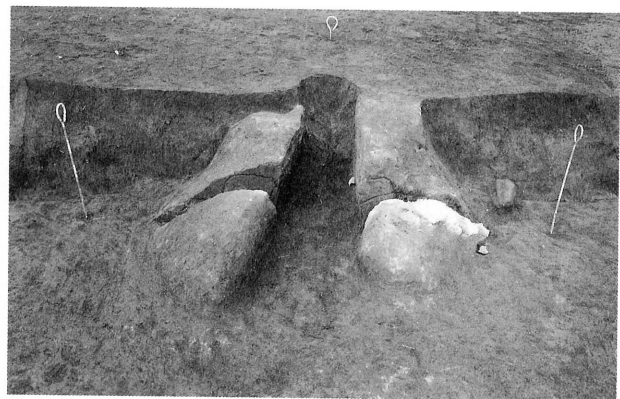
2号住居跡



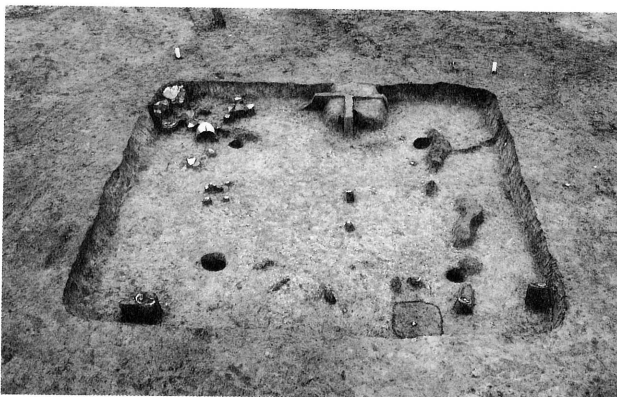
2号住居跡カマド



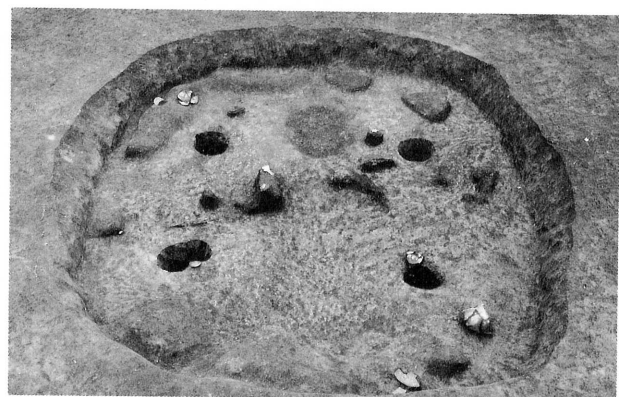
3号住居跡



3号住居跡カマド



4号住居跡



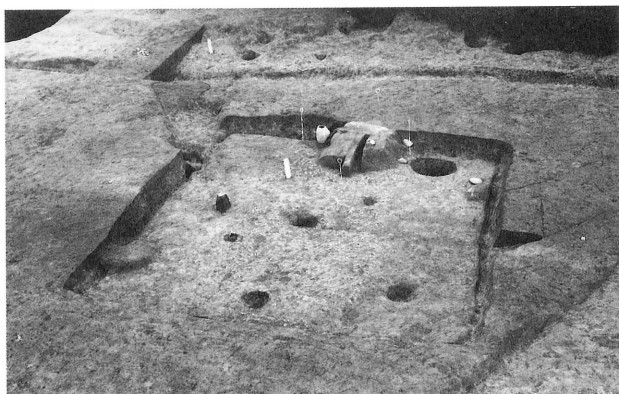
5号住居跡



6号住居跡



6号住居跡遺物出土状況



7号住居跡



7号住居跡カマド



8号住居跡



9号住居跡



10号住居跡



10号住居跡カマド

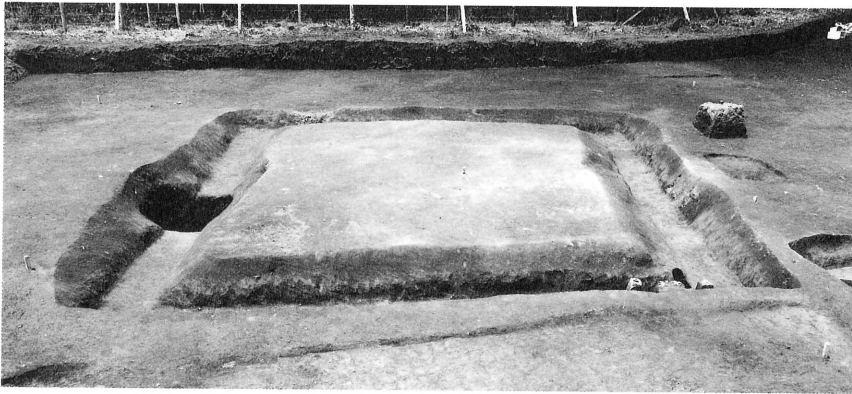
图版 6



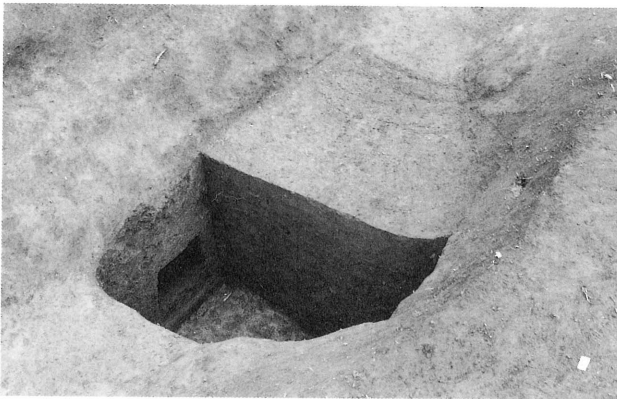
12号住居跡



12号住居跡・1号溝土層



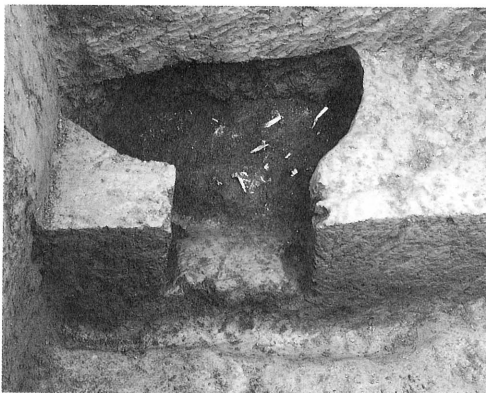
1号方形周溝遺構全景



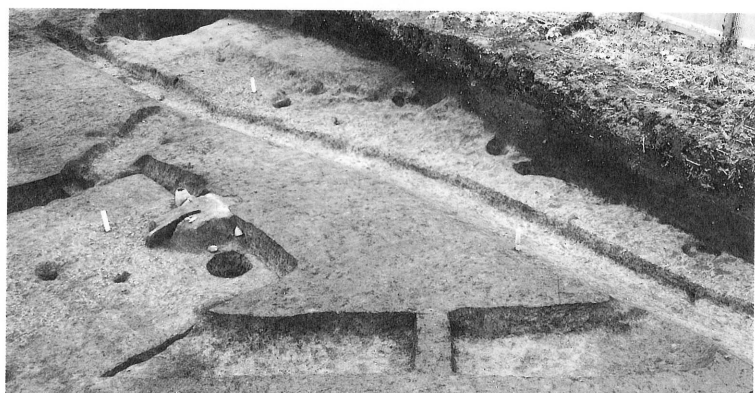
1号方形周溝遺構竪坑検出状況



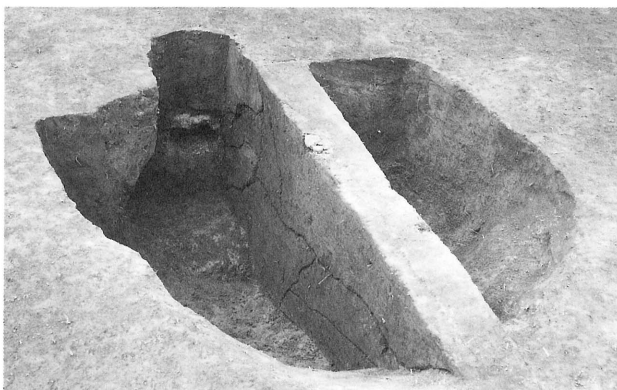
1号方形周溝遺構竪坑検出状況



1号方形周溝遺構玄室



2号方形周溝遺構



14号地下式改葬墓



14号地下式改葬墓



14号地下式改葬墓



26号地下式改葬墓



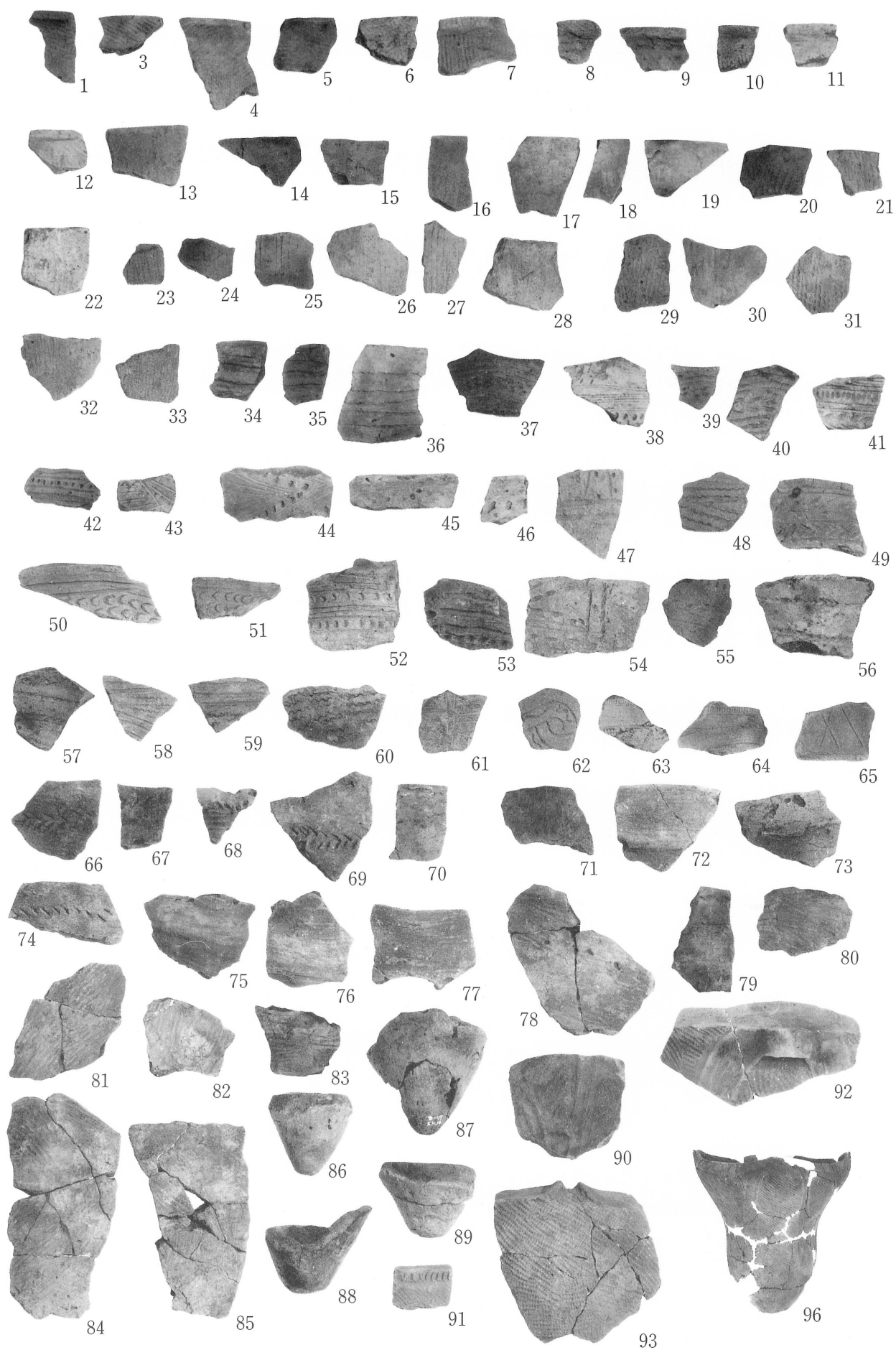
44号地下式改葬墓

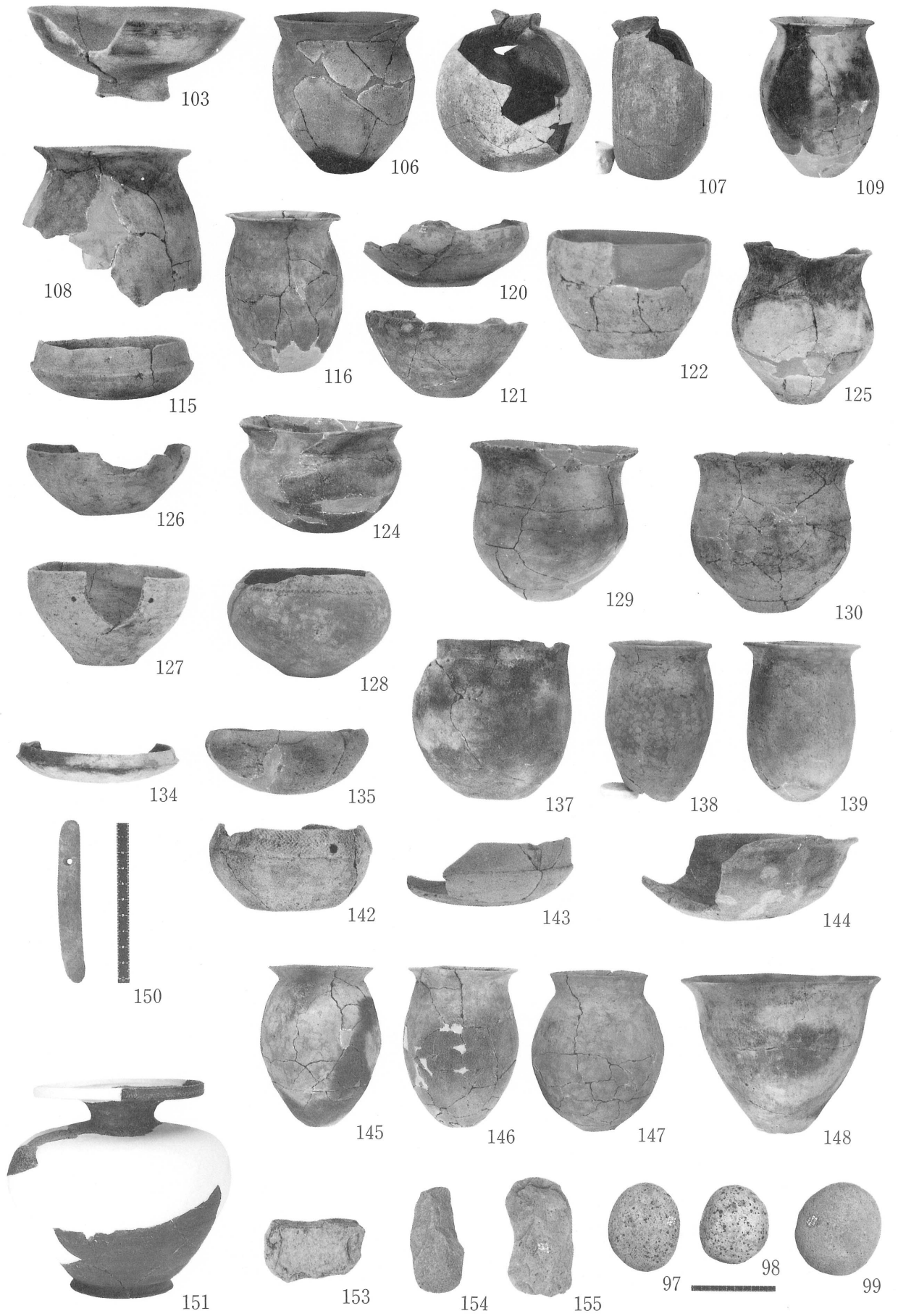


26号地下式改葬墓



遺跡近影





財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第33集

福増山ノ神遺跡発掘調査報告書

平成元年 3月20日 印刷

平成元年 3月30日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 株式会社 城 装
財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市馬立817番地
TEL 0436(95)2755

印 刷 株式会社 弘 文 社
千葉県市川市市川南2-7-2
TEL 0473(24)5977